

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2008.11

No.91
増刊号

会報

創立 30 周年記念特集号

目次

■ 日本分子生物学会会報 第91号増刊号（創立30周年記念特集号） 発行に際し 長田重一	1
■ 日本分子生物学会創立30周年に寄せて 大石道夫	2
■ 日本分子生物学会事始 岡田吉美	3
■ 分子生物学会の先史時代 関口睦夫	5
■ 研究活動の活性化と社会貢献 三浦謹一郎	8
■ 学会が設立された頃の思い出 高浪 満	9
■ 私と学会 吉川 寛	10
■ 記念座談会『日本分子生物学会30年の歩み』	12
○ 創立30周年記念座談会、企画までの経緯	12
○ 我が国の分子生物学の始まり	13
○ 渡邊 格先生	13
○ 分子生物学シンポジウムの時代	14
○ 1976年「分子生物学者の組織創設についてのWG報告」	17
○ アシロマ会議	19
○ 分子生物学会が出来た頃	20
○ 分子生物学会が持っている特質、アイデンティティー！	21
○ 1978年、第1回年会の開催	23
○ 分子生物学会この30年と、将来に向けて！	23
■ 資料	29
○ 趣意書・写（1978年）	29
○ 歴代の年会長／会長（理事長）名簿	30



特定非営利活動法人
日本分子生物学会
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/>

特集記事についての感想、ご意見がありましたら、是非、学会事務局 info@mbsj.jp までお寄せください。

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5

20 山京ビル 11 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

日本分子生物学会会報 第 91 号増刊号（創立 30 周年記念特集号）発行に際し

2008 年 11 月

会員各位

京都大学大学院医学研究科 長田 重一
(日本分子生物学会 第 15 期理事長)

1978 年 12 月、約 600 名で発足しました分子生物学会は、今年、創立 30 周年の節目を迎えました。現在は会員 16000 名を擁する我が国でも有数の学会に成長いたしました。

このような節目の時期に、前期の第 15 期理事会・執行部では、学会創立 30 周年を記念しまして、特集記事を掲載した会報増刊号を企画いたしました。本会設立から創立初期におきまして、学会長・年会長をお努めになられた先生方に、創立から黎明期に至る学会の歴史・エピソード・当時の研究環境、等々につきまして、自由にご執筆頂き、特集記事として寄稿頂きました。

また、本年 6 月 28 日には、創立期に活躍されました学会長・年会長の先生方にお集まり頂き、『日本分子生物学会 30 年の歩み』と題した記念座談会を開催いたしました。座談会では、我が国における分子生物学の夜明け～学会創立～黎明期に至るさまざまな貴重なお話し、なつかしいエピソードがたくさん披露されまして、本会報に座談会記録として収めております。

会員の皆様におかれましては、当時の本学会を取り巻く状況、先駆者の思い、等々を感じてくださると幸甚に存じます。

【学会創立 30 周年・会報特集記事 / 企画委員】

第 15 期理事長 長田 重一
同 副理事長 岡田 清孝
同 副理事長 宮園 浩平
同 庶務幹事 永田 恭介
同 広報幹事 加藤 茂明

【記念座談会『日本分子生物学会 30 年の歩み』 / 世話人】

第 10 期会長 大石 道夫

日本分子生物学会創立 30 周年に寄せて

第 16 回年会長・第 10 期会長 大石 道夫
(かずさ DNA 研究所所長、東京大学名誉教授)

30 年前にわずか数百人で旗揚げした日本分子生物学会が、今や会員数が 1 万数千人に達したという。このように急速に発展した学会は、我が国の自然科学の分野ではおそらく今までなかったことと思う。特に若いバイオ研究者の支持を得てきた点で、その発展を心からうれしく思う。

ただ興味深いことに、分子生物学会という学会は、我が国固有の学会であり、分子生物学の発祥の地であるアメリカには存在しない。その背景には、アメリカでは、DNA からの情報の流れを研究のコンセプトの中核に据えた学問（分子生物学）はきわめて斬新なものであったが、生物を研究対象とする多くの学会やグループが、このコンセプトやそれに関する技術を、それらの研究の発展の一段階として自然に受け入れ、敢えて新しい学会を創立する必要がなかったからであろう。一方、日本における生物を研究対象とする既存の多くの学会が、1953 年における DNA の構造の解明から必然的に想定された新しい生物学の流れを受け入れることに、抵抗を示すか、それを無視し、DNA からの情報の流れの重要性を認識するのに長い時間がかかったといえる。その結果、当時、出身学科が異なり、かつ限られた数ではあったが、志を同じくする若手、中堅の研究者が集って、既存の学会に対抗するような形で分子生物学を旗印とした新しい学会、日本分子生物学会を創立せざるを得なかったわけであるが、このことは当時の日本の学会一般のあり方を象徴する出来事でもあった。そもそも自然科学は、その真理の追究にいたる概念、原理、方法論は常に変わるものであるという信念のもとに、その時点で考え得る、ありとあらゆる考えを巡らし、又、新しい手法を取り入れ、駆使して、真実の解明につなげるべきものであり、過去における概念や研究方法などは本来、全く無関係な筈のものである。

翻って、日本分子生物学会の創立に至る経緯は、これだけ発展した現在の分子生物学会にとって、もって他山の石とすべきものであろう。何故なら近い将来、我々も又、過去の多くの日本の生物や生化学関係の学会と同じような落とし穴にはまる可能性すらあり、このことは日本分子生物学会の将来の発展とは無関係ではない。DNA からの情報の流れの重要性は既に確立されたが、新しい研究分野、例えば、脳科学においては、そこに未知の概念や革新的な研究手法が存在することは間違いない。日本分子生物学会の創立以来、この会の発展にいささかとも関わってきた者の一人として、私は、この学会の果たした過去 30 年にわたる役割を評価する一方、その概念が固定化されることなく、今後も絶えず柔軟な思考方式を受け入れて、これからの発展につなげていくことを心から願うものである。自然科学の研究においては、固定した概念は存在しないものである。

日本分子生物学会事始

第1回年会長 岡田 吉美
(東京大学名誉教授)

1978年12月5日、日本分子生物学会は600名の会員で発足した。そして30年を経た今日、発足当時の想像を遙かに超える会員15,000名のマンモス学会にまで成長した。しかし悲しいことに、学会設立に最も尽力された初代会長渡邊格、初代庶務幹事内田久雄の両先生は、昨年相次いで他界された。30年前、学会設立に関与した人々の胸のうちには、今なおそれぞれの想いがあるであろう。この小文は、日本分子生物学会の発足に第1回年会長（当時は年会幹事といった）として立ち会った私が、若い研究者たちに伝える一つの小さな歴史である。

日本の分子生物学は、アメリカに留学して分子生物学を学んできた若い研究者たちによって、ばらばらに始められた。そしてそれらの人たちが、渡邊格先生を中心とする文部省科学研究費特定研究に集まり、1970年から分子生物学グループの集まりとしての分子生物学シンポジウムが始まった。

やがてその中で研究者の学部横断的な組織をつくる必要性が話し合われ、1976年にワーキンググループによる分子生物学会設立が提案された。それをうけて1978年3月発起人会が開かれ、渡邊格先生を代表者とする設立準備委員会が正式に発足した。私は集会担当の実行委員に選ばれ、第1回年会プログラム委員会の代表者も兼ねることとなり、年会運営の責任を負うこととなった。

第1回の年会の運営は、すべてが未知からの出発であった。そして第1回の運営によって、それ以後の年会運営の基本的な形が規制されるという大きな責任も負わなければならなかった。

まず何人の発表者が集まるのか、そのためにどれだけの会場を準備すればよいのか、さらにそれまでの分子生物学グループの人たちの特別の考え方もあって、それが最初の難問であった。分子生物学シンポジウムでは、すべての人の発表をすべての人が聞き、老若関係なく活発に討論を行うのが常であった。プログラム委員会では、学会になってもこの基本精神は引き継がなければならない、と主張する人たちが多数を占めた。しかし運営責任者としては、受け入れられない主張であった。

学会になれば、シンポジウムの時代より多数の発表者が集まることが当然予想される。それを3日間の限られた年会で、十分な討論の時間も入れて、1会場にどのようにして詰め込むことができるのか。私は説得して、やっと2会場までは認めるということで、この問題は解決した。そして当時設立されたばかりの日本学会事務センターの協力をえて、大手町にある農協ビルに、農協ホールと国際会議室の2会場を確保した。

最大の難問となったのは、応募された演題の採否であった。分子生物学シンポジウムの時代とは違い、学会となって演題を公募するとすれば、どんな演題が応募されてくるかわからない。分子生物学というには余りにもかけ離れた演題があった場合、それをどう取り扱うか。議論の末、それは採択しないことになり、演題募集の通知には「申込発表の採択については本会にご一任下さい」という一文が入れられた。

予想を上回る演題の申し込みがあった。日程も考慮した結果、相当数の不採択の演題が生まれた。そして年会プログラムを送ったあと、不採択になった人たちからの抗議が相次ぐこととなった。

シンポジウムでは主催者の考えによって演題を選ぶことができるが、学会では会員すべてに発表の権利があるはずだ、というのがその主旨であり、それはもっともな抗議であった。この人たちとは何回か議論を重ね、ある程度を理解をすることもできた。しかしその中で、全く取捨のつかない強硬な会員の抗議があった。不採択とした演題の中に、京大全共闘のメンバーのものがあったからである。

当時はまだ全共闘による学会粉碎の余波が残っていた時代であった。彼らの主張はただ一つ、会員の権利を認めないような学会の設立は断固粉碎するというものであった。それまでに多くの学会の年会が粉碎され、年会が開かれぬ年が続いた時代があった。それでも既存の学会は、嵐が過ぎれば次の年に年会を復活させることができた。しかし分子生物学会の場合、設立総会と第1回年会が粉碎されれば、学会そのものが生まれぬことになる。それは責任者としてどうしても防がなければならなかった。

私は彼らからの抗議と粉碎予告の電話を何回か受けることとなった。1時間以上に及ぶ電話もあったが、たとえどんなに忙しくても、こちらから電話を切ることはできなかつた。こちらから切れれば、我々の主張に一切耳を傾けず、勝手に電話を切ったとして粉碎の理由付けにされかねないからであった。今になれば、気の短い私にとって、一番長く耐え抜いた説得と忍耐の時代だったなと懐かしく振り返ることができるが。

このような状況を受けて、再度プログラム委員会と設立準備委員会が11月3日に開かれ、議論の末、渡邊先生の決断によって、全演題採択と決まった。私は責任をとってプログラム委員会の代表を辞任し、かわって渡邊先生が代表者になった。もちろんこれは形の上だけのことであって、実際の運営に変更はなかった。急遽新しいプログラムの再編成と印刷、送付が行われ、やっと12月5日に間に合わせる事ができた。

全演題採択の結果、一般演題の発表件数は162になった。そのため年会のスケジュールは大幅に変更しなければならなくなった。初日5日は午後からと案内されていたが、午前からに変更された。演題発表は最初17時までの予定であったが、これも19時まで延長しなければならなくなった。幸い会場は空いていたので、時間延長の手続きだけですが、もし先約が入っていたらどうなっていたのだろう。今思い出しても冷や汗が出る。

こうして12月5日10時、日本分子生物学会は二つの特別講演で始まった。一つは渡邊格の「日本の分子生物学」(座長内田久雄)、もう一つはS. Brennerの「今後の分子生物学」(座長渡邊格)であった。続いて11時40分から総会が開かれ、渡邊格設立準備委員長の経過報告、関口睦夫準備委員会実行委員の会則説明があった。懸念された全共闘からの質問があったが、幸い実行行使はなく、こうして日本分子生物学会はやっと発足した。

学会事務局からいただいた当時の会報No.1のコピーを見ると、その時の事情は次のように述べられている。

「出席者から第6条の“会員は本会の行う諸事業に参加し”という記述の解釈をどう考えるか、につき説明が求められた。これに対し渡邊格委員長から“大会において会員は業績を発表するのは当然であり原則的にはすべて採択されるものである。しかし会員には資格制限がないため、ときには分子生物学と全く無関係な分野のもので学会発表として明らかにふさわしくないような内容のものが申し込まれることもあり得る。そのような場合には不採択にする可能性があるが、ただしその際、評議員会の議を経る必要がある”との解釈がのべられた。」

またその他の項目の中で「渡邊格準備委員長より特に発言が求められ、今回の大会の準備段階で申し込まれた発表の一部を、いったん不採択とした事情につき説明がなされた。この責任はプログラム編成にあたってあらかじめ原則を定めなかった準備委員会にあり、その不手際を詫びられた」とある。

あれから30年経ったという。年會を一緒に手伝ってくれた日本学会事務センターは、もう今は無い。現会員の中には、全共闘という言葉の意味すら知らない人たちも大勢いることだろう。そして傘寿を目前にした私の脳細胞は、もはやその若い人たちの発表に全くついていけなくなり、ただ昔話を語るだけになった。

分子生物学会の先史時代

第2回年会長・第6期会長 関口 睦夫
(九州大学名誉教授、福岡歯科大学客員教授)

今年で分子生物学会は創立30周年を迎えることになった。この間に分子生物学を中心とする学問分野は大いに発展し、それに伴って学会も急成長した。創立当時のことをふり返ると感慨ひとしおのものがある。学会の設立に中心的な役割を果たされた渡邊格先生と内田久雄先生がこの1年半ばかりのうちに相ついで亡くなられ、一つの時代が終わったという感を禁じ得ない。

この6月に、学会創立の頃を語る座談会があり、私も出席した。当時若手であった人達も年齢70歳をはるかに過ぎて、これも時の流れを感じさせたが、それでも当時のことを話しあうと昔にもどった感じであった。その折、宮島で開かれた「今後の分子生物学についての座談会」を私が持ち出したが、あまり覚えている人はいなかった。これは1971年(昭和46年)の9月に渡邊格さんの呼びかけで開かれた集会で、分子生物学会の創立を語る時欠かせない一つの道程ではなかったかと思う。時は分子生物学会創立の7年前のことである。実はこの会の模様は「今後の分子生物学」についての座談会から」と題して私自身が「蛋白質 核酸 酵素」誌(vol. 16 No. 13 p. 1184)に書いているので、同誌の了解を得てその冒頭の部分を紹介する。

「今後のわが国の分子生物学をいかに進めるべきか——これを中心テーマとして分子生物学の研究者と物理学、化学、生物学、発生学、基礎医学など関連分野の研究者達との話し合いの会が、9月11日、12日の両日広島県の宮島で行われた。これは渡邊格氏を中心とする分子生物学の将来についてのワーキンググループの人たちが発起人となって関連分野の研究者に呼びかけて開かれたもので、各分野の研究者四十数人が参加して意見の交換が行われた。

会はず渡邊格氏の挨拶で始まり、その中でこの会を開くに至った趣旨の説明が行われた。このような形式の会はこれまであまり開かれたことがなく、参加者の中にもいったい何が始まるのだろうかというまどいが見られたほどであったので、会の性格を説明するためにも簡単に同氏の発言の要旨を紹介してみよう。

“これまでの分子生物学の研究によって遺伝現象の本筋が分子レベルでほぼ明らかにされたが、今後はこれをもとにして人間をも含めた、より広い生命現象を対象に研究を進める必要がある。取上げる研究対象がバクテリアやファージから多細胞生物へと大きく広がることにより、隣接分野との接点もこれまでの物理学、化学だけではなく、発生学や生理学へと広がっていく。この際今後の日本の分子生物学の進むべき道、あるべき姿から、具体的なテーマの選定や研究の体制づくりをどう進めていくかなどについて関連分野の研究者の注文をじかに聞き、いっしょに考えていこうというのが今回の会合のねらいである。”

渡邊さんの挨拶に引き続いて各分野の研究者からそれぞれ意見が述べられた。11日の午後は医学、生物学の分野から、12日の午前化学、物理学の立場から発言してもらい、その間に分子生物側の人たちがそれに答えたり、意見を述べるといふ形が一応予定されていたようだが、発言は必ずしもこれにとらわれず、またそれぞれの人の意見も千差万別で議論もなかなか一点に集中し難いという感があった。実際、この会の設営にあたられた大沢省三さん(当時広島大学)と最近話をする機会があったが、同氏も同じような印象をもったということであった。そこでもう一度前記の報告から当時の状況をふり返ってみよう。

「このように主題が転換期の分子生物学ということであったので、発言が新しい分野にはいるとすれば何をどうすべきかということに傾いたが、これに対して“バクテリアの段階でもまだわからない点がたくさんある。これをほうっておいてよいのか”、“分子レベルの基礎的な問題をもっと掘り下げて研究すべきだ。複雑な系に進むにはもう少し準備が必要なのではないか”という意見が出された。おそらくこの点についてはこの会に出た分子生物学者の多くは、“いままでの分子遺伝でわかったのはほんのあらすじだけであって、分子という形で本当にわかっていることはまだ非常に少ない。これらの問題は当然解決していかなければならないが、それとともに新しい波としての多細胞生物への指向はやはり今考えておかなければならない。それはむしろこれから出てくる若い人たちの手にゆだねる性質のものかもしれないが、われわれはその道の入口を少なくともきり開いておく義務があるのではないか”という考えにうらうちされてこの問題にとりくんでいるのではないかと思った。……(中略)……そう考えていくと現在の分子生物学の研究者の中に

横のつながりのための組織のないことが痛感される。これまで生物物理の特定研究の分子遺伝班会議が部分的にその役割を果たしてきたかにみえるが、それも来年からはない。縦割りの分子生物学会のようなものはあまり必要なくかえって害があるかもしれないが、少なくともセクショナリズムで各分野に分断されている分子生物学研究者の何か新しい連絡組織が必要なのではあるまいか。研究成果を発表して相互啓発するためにも、また年配者と若い人たちがいっしょになって未来の生命科学への足がかりをつくるためにも。これが宮島の集会をおえての私の感想である。」

この座談会をうけて、翌年から「分子生物学シンポジウム」が開かれた。このシンポジウムは1972年（昭和47年）から1977年（昭和52年）まで6年間ひき続いて開かれ、それが1978年に発足する分子生物学会のいわば母体となった。当時のことは余り正確に記録されていないようなので、何か資料はないかと研究室や自宅の本棚の隅を探しまわした結果、なんとかそれらのシンポジウムのプログラム集をみつけることができた。それをもとにまとめたのが次の表で、それには第1回と第2回の年会の記録も加えてある。

分子生物学会の発足までの会合と発足直後の年会

会 合	期 間	場 所	参加者など
「今後の分子生物学」についての座談会	1971年(昭46)9月11、12日	広島・宮島	様々な分野の研究者
第1回分子生物学シンポジウム	1972年(昭47)12月8、9日	大阪(武田研修所)	総合(B)「分子生物学からみたライフサイエンスの総合研究」主催、発表40演題
第2回分子生物学シンポジウム	1973年(昭48)12月6、7、8日	大阪(武田研修所)	同上総合(B)主催 発表61演題
第3回分子生物学シンポジウム	1974年(昭49)11月28日～ 12月1日	八王子(大学セミナーハウス)	同上総合(B)主催 発表68演題
第4回分子生物学シンポジウム	1975年(昭50)12月9、10、11日	八王子(大学セミナーハウス)	発表79演題 Proceedings(英文)発行
第5回分子生物学シンポジウム	1976年(昭51)12月15日～18日	大阪(武田研修所)	発表89演題 Proceedings(英文)発行
第6回分子生物学シンポジウム	1977年(昭52)11月29日～ 12月2日	大阪(日本生命研修所)	発表95演題 Proceedings(英文)発行
第1回日本分子生物学会年会	1978年(昭53)12月5日～7日	東京(農協ホール)	発表162演題 (年会係 岡田吉美)
第2回日本分子生物学会年会	1979年(昭54)12月17日～20日	福岡(電気ホール)	発表187演題 (年会係 関口睦夫)

分子生物学シンポジウムの開かれていた1973年から77年の時期は、アメリカで初めてDNAクローニング実験が行われ、その後一時的な組換え実験の停止を経て、遺伝子組換えによる真核生物の分子生物学の研究が爆発的に始まろうとしていた時期であった。このような状況のもとで、1976年の第5回シンポジウムで学会設立についてのワーキンググループの報告が行われ、それをうけて1978年3月20日に東京の国際文化会館で分子生物学会発起人会が開かれた。それにひき続いて「日本分子生物学会」設立準備委員会がつくられ、そこで会則の原案や発起人の依頼、第1回年会の準備が行われた。そして1978年(昭和53年)12月5日に開かれた第1回年会の総会で学会が正式に発足することになった。この間の事情は「蛋白質 核酸 酵素」誌の2007年6月号の「渡邊格先生を偲ぶ」特集の中に私が「分子生物学会と格さん」と題して書いたので、興味のある方はそれを見ていただければと思う。

ここでは宮島での座談会から分子生物学シンポジウムを経て学会設立に至る経過について書いた。それではもっと前の時代はどうだったかということになるが、それについては私自身も断片的にしか覚えていない。研究集会としては「核酸シンポジウム」、生物物理の特定研究の「分子遺伝」の発表会(いわゆる八王子セミナー)などがあつた。それとは別のラインであるが、昭和36年(1961年)に金沢大学医学部で始められ、その後昭和38年(1963年)から43年(1968年)まで阪大微研の観音寺の施設で行われたフェージ講習会がわが国の分子生物学の立ち上げに大きな役割を果たしたことを述べておきたい。未だ研究環境が充分整備されてなかった時代に金沢大学で高木康教さんが中心になって始めら

れ、観音寺では微研の釜洞醇太郎所長（財団理事長）のはからいで当時としては破格のよい環境の下で、実験を通じて分子遺伝学の基礎を体得するコースが開かれた。講師陣も富沢純一さんを始めとして当代一流の人達で、2週間にわたって泊りがけで行われた。昼間はファージや細菌を用いて実験し、夜は第一線の研究者が入れ替わりたち代わり訪れてセミナーを行い、時には講師陣も交えて夜遅くまで議論した。私は金沢大学での第1回の講習会を横目でみてアメリカへ飛び立ち、4年後に帰国してから2回ほど観音寺での校長さんを勤めたが、後になって分子生物学の分野で大きな成果をあげた何人かの人達から講習会で受けた刺激と感動を聞かされて、あらためてこのような活動の意義を感じとった。

ファージ講習会はその一例であるが、異なったバックグラウンドを持つ若い世代の人達が話し合う場をもつことは、その人達が将来の目標をきめていく上で必要なことではないかと思う。今では分子生物学は大学の講義でも定着し、立派な教科書もある。それぞれの研究室には同じ途を志す仲間がいて論じあうことはできるけれども、もっと広い範囲の人達から刺激を受け、切磋琢磨することが新しい学問を切り拓いていくには必要ではなからうか。分子生物学会は大きくなり、十分に成熟したが、これからの世代をどう育てていくか、それについても考えをめぐらせていただければありがたい。

研究活動の活性化と社会貢献

第11回年会長・第7期会長 三浦謹一郎
(東京大学名誉教授、国立遺伝学研究所名誉教授)

分子生物学会創立30周年を記念して学会の創設の経緯についての記録を残しておこうと執筆を依頼された。この学会を産み出す中心人物は日本における分子生物学の旗手であった渡邊格^{イタル}初代会長その人であった。渡邊先生は昨年3月に90歳で生涯を閉じられた。弟子の一人であった筆者は分子生物学会の会報に追悼文を書くことを依頼された。(会報No. 87(2007年)p. 2~3) 渡邊格先生は戦後の日本で新しい基礎的学問分野として胎動し始めていた分子生物学という名前さえついていなかったこの分野の研究の世界の動向をよく把握し、自らもその分野で研究活動を活発に始められたが、日本における分子生物学の研究体制づくりにも積極的に貢献されたので、その御活躍ぶりを追悼文に記した。日本における分子生物学の黎明期や学会設立に至る背景を知っていたら一助になるかと思うが、ここではそのとき書き残したこと——本文の表題に書いた二点について記そうと思う。

1952年頃有志によって作られた(旧)核酸研究会を母体として渡邊先生は1972年に分子生物学の研究会(分子生物学シンポジウム)を作られたが、いわば同志の間で自由に討論ができる会であった。新しい学問分野とその研究会の雰囲気若い研究者や院生、学生を惹きつけることになり、集まってくる人の数は急速に増えた。それでやはり学会を作らなければならない事態になってきた1976年に、作るならこの集団の活気を打ち消しにするようなことはしないで形式にとらわれない学会組織を作りたいと渡邊先生は考えられた。学会を作ることは分子生物学の研究の活性化をはかることが目的であるが、研究体制の問題や研究費の獲得の問題を解決して行くためには必要なことであった。初代会長渡邊先生も第二代会長であった内田久雄先生もこういった問題に対して非常に積極的で日本学術会議や文部省の委員会などで活躍された。このような活動の結果、文部省の科学研究費の研究領域に「分子生物学」が採用されたり、特定研究が立ち上げられたりしている。「ゲノム研究」や「細胞生物学研究」「脳・神経の研究」「発生学」「癌の基礎研究」「ウイルスの分子生物学研究」「感染症の基礎研究」……など生物科学における大きな課題研究の立ち上げにも分子生物学会、あるいは会員が大いに貢献している。一例として挙げるなら、分子生物学会が設立されてすぐの頃に行われた特定研究の成果は「生体における分子識別」として共立出版社から刊行されている(1979)。

次に学会としての社会貢献で学会設立後初期の頃に行われたことは分子生物学会が主導で「組換えDNA実験安全」委員会制度を立ち上げたことであろう。1975年米国の分子生物学者カリフォルニア大学のPaul Bergらが主導で遺伝子操作の安全性を科学者自身が自主的に規制するガイドラインを決めようという国際会議が米国のカリフォルニア州のアシロマで開催された。この会議のあと各国で自主的に組換えDNA実験の法的規制を行うガイドラインが必要となり、日本でもこの制度を立ち上げるべく文部省に委員会が設けられた。その委員として分子生物学会からの渡邊格、内田久雄、飯野徹雄の3氏が参加して中心的役割を果たした。その他小委員会には斎藤日向、松原謙一他多数の国会関係者が参加して組換えDNA実験安全規程を短期間に作成することに精力的に働いた。その後、各事業所毎に組換えDNA実験安全委員会が設けられ、組換えDNA実験室への立ち入りは規制されている。このような規制が行われるようになってから人体に対する事故は世界的にも0であるということで、この科学者による自主規制は成功している。これは分子生物学会としては一つの大きな社会貢献であるといえる。

分子生物学会からの社会貢献としては今後、エネルギー問題や環境問題解決のための基礎的な面での支えをすることがあるだろうし、医薬品製造や種々のバイオテクノロジーでも基礎的な面での支えとなるであろう。

また、教育の面でも中学校、高等学校、大学などでも分子生物学は生物科学の基礎として組み入れられるようになってきているし、一般社会人でも分子生物学の新しい進展には興味を示す人が多い現在、学会としても果たすべき役割についてはこれからますます検討すべき課題であろう。

学会が設立された頃の思い出

第5期会長 高浪 満

(京都大学名誉教授)

渡邊 格先生に30年経って会員数が1万6千人になったと報告したら、それは当初から予想していたことだよ、と云われるに違いない。

分子生物学の集まりのルーツは、1960年代の後半に始まった八王子セミナーハウスを拠点とするセミナー形式の集会ではないかと思う。私は途中から参加させてもらったのでこの集会が始まった経緯を知らないが、バンガロー風の宿泊施設に分宿して行われていた集会が懐かしく思い出される。1970年代になって渡邊先生が大型研究費の代表者となられ、研究班を組織されたことを機に研究報告会を兼ねた分子生物学シンポジウムが開催されるようになった。回を重ねるにつれ、学会設立の問題が話題に上った。意欲的だったのは渡邊先生で、学会活動の重要性を強調された。一方、学会運営に係る庶務のことを考えるとシンポジウムの形を続けるほうが実質的ではないか、という意見もかなりあったと思う。このような議論を経て学会設立の方向で意見がまとまり、内田久雄さんの研究室を事務局として学会設立の準備が始まった。設立準備の段階で記憶に残っているのは渡邊先生のお供をして文部省へ説明に行った時のことである。担当の方から、設立の趣旨はよくわかるが、その趣旨によると将来バイオに関連する全ての研究領域に係ってくるのではないか、というコメントをもらった。これに対して渡邊先生が、その通り、と答えられた。しかし当時の私どもには学会の将来の形まで議論する余裕がなかったというのが率直なところである。

総会を兼ねた第1回の年会は岡田吉美さんを年会長に東京の方が中心となって準備に当たられた。学会への参加者が、百人規模だったシンポジウム時代の数倍にもなったため、準備にご苦労があったようである。発表の申し込みも多く、一旦編成されたプログラムを、学会は学会員の発表の場という視点からの抗議に、一部改訂するなどして開会に漕ぎつけられた。予定通りに会が終了したとき、一番安堵されたのは渡邊先生だったのではないかと思う。

以上の拙文、乏しい記憶をたどるだけで書いたので記憶違いがあればご容赦いただきたい。

私と学会

第4回年会長・第8期会長 吉川 寛

(大阪大学名誉教授、奈良先端科学技術大学院大学名誉教授)

私の学会デビューは1962年の秋、オレゴン大学で開催されたアメリカ遺伝学会の年会であった。大学院終了直後に渡米し、博士後研究員として新しい研究をスタートして2年目、枯草菌染色体のDNA複製は複製起点から終点に逐次的に進行するという新しい仮説を手には不安と期待を胸に口頭発表の舞台に登壇した。ひとつ前には、T4ファージ研究で著名なR. Edgarが形態形成にかかわる温度感受性変異を網羅的にマップするという素晴らしい成果を報告した。その見事な発表に圧倒され、私の不慣れな英語はますますたどたどしくなり、永遠に続くようにおもえる20分がようやく終わった。大胆な仮説と枯草菌の形質転換法で遺伝子量を測定するという新しい技法に対する懐疑的な聴衆の質問に足が震えかけた時、Neurospora遺伝学の権威であるN. Horowitzが“Yes, I believe that you are right”とかけてくれた声はいまも耳元に心地よく残っている。そのご、63年と68年のCold Spring HarborのDNA複製のシンポジウムなど、私にとってアメリカでの学会は枯草菌というマイナーな研究分野で生き続けるための戦場であった。それはまた、O. Maaloe、G. Stent、A. Kornbergなどよき理解者との出会いの場でもあった。

1969年に帰国した私にとって日本の学界は異文化のように感じられた。前年の“岡崎フラグメント”発表に強く触発され、枯草菌染色体の複製起点の分離を目指した実験計画に胸膨らませて金沢の土を踏んだ私を待っていたのは、“科学研究とは何か、学会賞は誰のものか”を問う大学紛争であった。また、分子生物分野の指導者は実験よりも理論や哲学に傾き、分子生物学の終焉という議論さえ起こっていた。それにしてもDNAについての学界の認識はひどかった。ある生化学の権威は私のDNAに対する熱意を困惑気味に受けとめ、私に掌をみせながら、この形がDNAで説明できる筈はないでしょうと問われた。当時世界が注目していたE. Lewisらのショウジョウバエの形態形成に関する遺伝子発現調整モデルについての私の説明は全く理解してもらえなかった。一方、階層性を重んじる生物学者には分子生物学は要素還元型の科学として評判は良くなかった。

このような状況を憂えた私達40歳代、第二世代の分子遺伝研究者が第一世代の先輩の手足となって、DNA研究推進のためのキャンペーンを行った。その結果が1978年の分子生物学会の設立と相前後した科研費の分科細目への採用や特定研究「分子識別」の採択など分子生物の社会的認知に至るのである(注1)。しかしながらそれまでの間、私のグループがDNA複製研究を進める道は厳しく、細々とした研究費を支えてくれたのは分子生物学コミュニティではなく、がん特別研究を推進する人々であった。当時の“がん特”はDNA研究を導入することに熱心で、そのコアとも言うべき複製、転写、変異などの研究に対し分野を超えて支援してくれた。故高橋泰常氏のがん研究班で、岡崎令治、村松正美、関口陸夫さんと親しく議論を交わしたことが懐かしく思い出される。

学会創設後、私と分子生物学会とのかわりは運営活動が中心となり、学問の場は国外の学会や研究会に求めるという二重構造を持つようになった。第4回の年会を金沢で開催した時は年会長としてすべての会員があらゆる行事に自由に参加できるように心を砕いた。また、1993-95年の学会長任期の間には生化学会との合同年会を企画、両学会の関係者の反対を克服して第19回の年会を札幌で開催することにこぎつけることができた。合同開催は学会指導者にとってはメリットの少ないことではあるが、両学会に重複して参加する必要がある若い研究者にとっては有意義な試みであったと自負している。当時、生化学会のある長老から「貧乏で行儀の悪い学会」と酷評された分子生物学会が今や生化学会と対等に国際会議を共催する状況まで進化したことに隔世の感を抱いている。また、学会発足当時から懸案であった学会の欧文誌について、富沢純一先生の熱意と大石道夫さんの献身的な努力によってGenes to Cellsの発行に結実したことは学会長として嬉しい思い出になっている(注2)。

私は最近2-3年、年会に参加していない。マンモス化した学会に魅力を感じなくなったこと、退職者には費用がかかり過ぎることなどの理由もあるが、なによりも学会から原核生物が消えたことが原因だ。1978年D. Baltimoreは「分子生物学はDNA、RNA、タンパクがどのような相互関係をもっているかを研究する学問分野だ」と述べている。その本質は不変だし、原核生物にも新しい発見があるはずだが、ヒトからの距離が遠いというだけで分子生物学会における

評価が低くなっているのは寂しいことである。私はこの状況をむしろポジティブにとらえ、原核生物研究においてゲノムという新しいパラダイムを追求しようとする研究者と共に「日本ゲノム微生物学会」の設立に参加した。私の学会とのかかわりは新しい器の中でまだ続いている。

- (注1) 分子生物学会創設を検討するためのワーキンググループのメンバーは石浜明、志村令郎、関口陸夫、松原謙一、三浦謹一郎、溝渕潔、さんと吉川寛であった。
- (注2) 1979年、欧文誌発行について学会員にアンケート調査を行った、61名の回答者のうち発行について、反対30、賛成19、条件付き賛成7、無関心4であった。

記念座談会『日本分子生物学会 30 年の歩み』

世話人 / 司会：大石道夫（第 16 回年会長、第 10 期会長）

参加者：岡田吉美（第 1 回年会長）、関口睦夫（第 2 回年会長、第 6 期会長）、村松正實（第 5 回年会長）、松原謙一（第 7 回年会長、第 9 期会長）、三浦謹一郎（第 11 回年会長、第 7 期会長）

第 15 期執行部より：

長田重一（第 15 期理事長）、加藤茂明（第 15 期広報幹事）、永田恭介（第 15 期庶務幹事）

〔記録：福田博（分子生物学会事務局）〕

日時 / 開催場所：2008 年 6 月 28 日(土) 15：00～17：30 ホテルグランドパレス菊の間



大石道夫氏

創立 30 周年記念座談会、企画までの経緯

【長田】 第 15 期理事長の長田です。本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。

分子生物学会は昨年 12 月、第 30 回年会を開催し、学会創立 30 周年の節目を迎えました。1978 年 12 月、約 600 名で発足した分子生物学会ですが、現在は、会員 16000 名を擁する我が国でも有数の学会に成長しました。昨年は法人に移行し、学会運営全般において強化できたのではないかと思います。

学会のマンモス化によって、その企画運営でもっとも苦勞しているのが、年会運営です。昨年の第 30 回年会は、日本生化学会との合同開催の形式を取りました。今年、第 31 回年会も合同大会です。来年（第 32 回年会）は単独開催になります。年会のあり方については、昨年 12 月の理事会（詳細は会報 89 号の理事会記録参照：学

会 HP 掲載）で、かなり時間をかけて非常に活発な議論をしました。基本的には、その年会を主催する年会長の企画方針を尊重する、といった従来の精神を大事にしていますが、理事会メンバーもだいたい若返り、学会創立時のさまざまなことや、我が国の分子生物学の始まり、等々のことをあまり知らない人も執行部に入りつつあります。このような節目の時期に、30 周年座談会を企画させてもらい、多くの若い会員に今日の記録を伝えることができれば幸いと思っています。

この座談会の企画については、春に、大石道夫先生（第 15 期監事）に相談しまして、座談会の世話人、そして本日の司会進行をお引き受け頂きました次第です。ということで、ここからは、大石先生、どうぞ宜しくお願いします。



長田重一氏

我が国の分子生物学の始まり

【大石】 長田さん、座談会を企画するに当たっての経緯説明をありがとうございました。皆さん、宜しくお願いします。

長田さんとも相談しまして、今日は、分子生物学会の設立期、あるいはその前の流れを中心に話したいと考えました。今、会員は16000名とのことですが、当時はそれこそ数百人しかいなかったのですが、ですから、むしろ学会を作るに至った、それ以前の10年20年といった重要な流れがありますね。その頃のことを、ぜひ、皆さんに話して頂こうと思います。記録をまとめておく意味もあり、いつかは、このような会が必要なのでは、とは思っていましたが、皆さん、記憶の鮮やかなうちに！ということで企画をしました。不肖私がまとめ役をさせていただきます。ほかにも重要なぜひお呼びしたい方々がおりましたが、だいたいの研究分野と当時の状況を考えて、今回のメンバーとさせていただきます。

まずはお一人ずつ、最初にどうして分子生物学に入っていったか、志といますか、ご経験とその頃の周囲の状況など、ざっくばらんにご説明して頂きましょうか。では、三浦さんから。

【三浦】 我が国の分子生物学の始まり、日本における発足というのは、やはり僕の感じとしては、1953年のWatson、Crickの発表があった頃ではないか、という感じがします。

その頃、そういう方向のことを目指していた人たちが結構いたわけで、そのような集会をするという意味で分子生物学研究グループみたいなものができて、例えば、八王子のセミナーハウスや、関西では、大阪の日本生命で研究会をやりましたね。

【村松】 中之島でしたね。

【三浦】 そう、中之島の研修所を使って、泊まり込みの集会を開きました。あのセミナーは、我々がはっきりとそういうグループの存在を認識したことになるのではないかと思います。

【大石】 三浦さん個人が、実際にこういう研究を始められた当時の状況とか、そのきっかけは何だったのでしょうか。

渡邊 格先生

【三浦】 それは、渡邊格先生が、まあ、格（かく）さんにしましょう、昨年、格さんが亡くなられた時に、追悼文（会報87号）で詳しく書きましたが、分子生物学の旗手であった渡邊格さんの存在が大きいです。私は

大学院の博士課程と、そのあと先生の研究室の助手として、それほど長い期間ではないけれど、直接お世話になりました。格さんは、1953年のWatson、Crickの発表の、その前の年の1952年10月に、岩波の雑誌『科学』に、非常にクリアに、そのころの学問の状況を述べています「生命現象の探求と化学の役割」。今読んで、格さん、ずいぶんしっかりと、その当時に考えていたと思います。



三浦 謹一郎氏

私は、大学までは化学をやってきたわけですけど、大学に入る頃から、もうすでに、生物の物質構成をしっかりとやりたいという気持ちがあって、それで大学の時には、物理化学をやって、コロイドの研究に興味を持ちました。何故かいうと、どうも生体っていうのは蛋白質だと考えた、それは何かコロイドの状態であることを話で聞いたり本で読んだりして、そのような予備知識があって、そういう方向のことをしっかりとやって行こうと思って、コロイドの勉強をしたんです。大学院に入る時には、何ていうのかな、先進的な研究室へ行こうと思っていたわけです。

大学院に入る時に、東大の渡邊格さんの研究室というのは、どうもそういうことをやっているらしい……と、渡邊先生の所にちょっと相談をしました。渡邊さんは1953年の4月に、自分は、カリフォルニア大学のウイルス研究所に行くことになっているから、おまえさんは、もし入学が許可されたならば、隣の研究室の安藤鋭郎先生という蛋白質化学の先生がいるから、そこへ行ってみなさいと、そこで仕事をしてからうちへ来なさい、そういうことを言われ、全くその通りにしたのです。

それで結局そこへ行ってみると、やっぱりわかったわけです。要するに、本来の生物科学とは違って、分子生物学的なことと違いますか、それが東大理工研だったので、渡邊さんのほかに、安藤先生の研究室もあり、それから野田春彦先生、長倉三郎先生と、何かそういう活発なところだったわけです。

大学院で最初に入ったのは、蛋白質の構造研究の安藤研ですが、それは後で考えてみるとすごく良い経験だったわけです。最初に、生化学の基本となることを習得できたということです。1年ぐらい経った頃、渡邊研のほうの助手の人たちが、「もう、こっちに来い」と言っ

てくれて、実際には1954年から渡邊研で仕事をする
ことになりまして、それからRNAの構造研究の仕事をや
ることになっていきました。

分子生物学シンポジウムの時代

【村松】 分子生物学会の歴史ということですけど、「分子生物学シンポジウム」というのがありましたね。そのへんを、いつ頃から起こったかをお伺いしたい。というのは、僕がアメリカから帰ってきてみたら、もう分子生物学会シンポジウムがあったような気がするんですが。

【関口】 当時の状況、少し私が話しましょうか。

1970年代前半、まだまだ日本で分子生物学を志す人にはまとまった研究の場はなくて、さまざまな研究室に居候をしているような状況でした。分子生物学者の研究交流の場を確保するために、格さん、内田久雄さん、岡崎令治さん、高浪満さん、三浦さんや私らで「分子生物学シンポジウム」を発案して、1970年から毎年、八王子セミナーハウスなどで集会を開催したのです。この分子生物学シンポジウムが発展的に解消されて、1978年に分子生物学会が設立されたのですが、それにしてもこのシンポジウムは熱気に満ちた素晴らしい集会でした。

シンポジウムは毎年盛会でしたが、正式な学会にしてしまうと、規約とかシンポジウムの運営で色々制約も出てくるので、できるだけ自由に純粹に学問のことだけを追及、議論したいといった意識の強い会でした。このシンポジウムはえらい人気があって、当時、海外から帰国して研究室を構え始めた若手研究者も加わって、楽しかったです。遺伝学会や生化学会に行っても、なかなか分子生物学シンポジウムで議論していたような、そういう話をできる雰囲気ではなかったですね。我が国の分子生物学を支える中心に成りうる若手研究者の教育を考えたら、何か組織を作らなければならないということになり、格さんが「やっぱり分子生物学会みたいなものを作ろうか」ということを言われたことを覚えています。年長者であった格さんは、旧来の学会の形で作るの、これはまた大変だなという考えもあり、1971年に「今後のわが国の分子生物学の研究をいかに進めるべきか」といった座談会を開いているんです。

【関口】 この記録は、「蛋白質 核酸 酵素」16巻3号1971年に、私が「“今後の分子生物学”についての座談会から」のタイトルで書いていますが、実は格さんの呼びかけで、1971年9月11、12日に、広島宮島の宮島で会合が開かれているのです。

今後のわが国の分子生物学の研究をいかに進めるべきか、これを中心テーマにして、分子生物学の研究者と物理学、化学、生物学、発生学、基礎医学など関連分野の



関口睦夫氏

研究者の話し合いの会で、各分野の研究者40数人が参加して意見交換が行われました。渡邊格さんの挨拶、発言の要旨を紹介すると「これまでの分子生物学の研究によって遺伝現象の本筋が分子レベルでほぼ明らかにされたが、今後はこれをもとにして人間をも含めた、より広い生命現象を対象に研究を進める必要がある。取り上げる研究対象がバクテリアやファージから多細胞生物へと大きく広がることにより、隣接分野との接点もこれまでの物理学、化学だけでなく、発生学や生理学へと広がっていく。この際今後の日本の分子生物学の進む道、あるべき姿から、具体的なテーマの選定や研究の体制づくりをどう進めていかなどについて関連分野の研究者の注文をじかに聞き、一緒に考えていこう、というのが今回の会合のねらいである。」とあります。

この会合の主題が転換期の分子生物学ということだったので、発言が、新しい分野に入るとすれば何をどうすべきかということから、新しい分子生物学に即した学問研究体制や教育の問題、分子生物学に限らず新しい境界領域の開拓にはどうしても統合化が必要である、等々の活発な意見が出されました。今後の分子生物学を発展させる原動力となるのはより若い人たちであり、その分子生物学の研究者の中に横のつながりがないことが痛感されると当時の記事に書いています。それまで、生物物理の特定研究の分子遺伝班会議が部分的にその役割を果たしてきたが、それも来年（つまり1972）からはなくなるので考えなければならない。縦割りの分子生物学会のようなものはあまり必要なくかえって害があるかもしれないが、少なくともセクショナリズムで各分野に分断されている分子生物学研究者の何か新しい組織が必要なのではあるまいか、このような宮島の集会記事を1971年に書いています。

そこには、分子生物学をやっている人たちも20人ぐらいは来ていましたが、たいていは物理とか化学とか、それから医学と、全く違う分野の人が集まったわけです。新聞記者もたくさん集めて、大勢みえたのですよ。それで「分子生物学者の旗揚げ」といった記事が載ったりしました。

【村松】 核酸シンポジウムもその頃ですか。その前？

【関口】 「核酸シンポジウム」という形でしていたのは、

分子生物学シンポジウム（1970～）のずっとその前ですね。

【大石】 分子生物学会が出来たのが1978年ですね。それ以前、だいたい20年ぐらいの胎動期っていいですか、色々あったわけですよね。1960年代から、1971年の今の関口さんの宮島の会合の話しに至るまでの動きを、もう少し、皆さんの経験も含めて、ふれていきたいのですが。

【関口】 三浦さんと会ったりしたのは、二人とも大学院生で、彼は東大で、私は阪大で、しかも違う分野だけど、核酸シンポジウムで発表したりして友達になった。それが、我々が大学院の博士課程ぐらいですかね。

【三浦】 何年でしょう。核酸シンポジウムって、何年ぐらいに始まったんですかね。確か、1955年で、シンポジウムはもう3回目ぐらいでしたかね。僕はそこで初めて発表しましたが、そうすると1953年頃からですかね。

【大石】 1953年の前後から、どうぞ何かお願いします。

【関口】 もう1つは、この時期のファージ講習会、あれが大きかったと思います。

【村松】 僕はアメリカから帰ってきて、八王子セミナー、それにまず出てね。生化学会ではやられないようないろいろなディスカッションができるというので、そういうことがとても刺激的だった。僕なんかの時代はね、そういうところで発表して、初めは「そんな！ 微生物から何がわかるのだ？」なんて言われて、怒られたような記憶があるけど、無理にしゃべらせてもらったりしてね。

【大石】 岡田さん、当時の状況はいかがですか。

【岡田】 ちょっと細かいことは覚えていませんが、今日は、実は資料を持ってきました。

1993年に内田久雄さんが *Journal of the History of Biology* (vol. 26 no. 3 1993 pp. 499-517) に「Building a science in Japan : The Formative Decades of Molecular Biology」という論文を書いていて、日本のサイエンスがどうして起こったか、*Molecular Biology* がどうやって起きたかというのをまとめているのです。

彼が書いているのは、学会がどうこうということではなく、分子生物学が日本でどのようにして始まったか、ということで、1948年に木原先生が、第8回 *International Congress of Genetics* (ストックホルム) に参加されて、もうその時に、欧米で初めて「微生物遺伝学」ってのが始まっていて、ものすごく進んでいることを見て、彼が「これからは植物の遺伝ではなくて、微生物の遺伝の時代になるよ」と、そして弟子に「アメリカへ留学しろ」と言っているのです。

その第1号で、1953年に由良隆さんが渡米、1955年に小関治男さんが出発と。そういうことから分子生物学がいつから始まって、誰がいつどこへ行って、誰の研究室に入ったと詳しく書かれている。



岡田吉美氏

木原先生を慕って京大に行った人には、皆に「微生物遺伝をやれ」って言われて、それで末岡登先生も末岡多美子先生も「もう今は、微生物遺伝の時代だから、それをやりなさい」と言われたそうです。

その頃の微生物遺伝というのは、ビードルとかテータムとか、トランスフォーメーションの実験が1946年だったかな、そういうことがあって、だからそのへんが、日本の第1世代なのですかね。だから木原先生って、ちょっと僕たちとは分野が違うけど、そういう面での影響力は非常に大きく、非常にプラス面になっていますね。

【三浦】 私も分子生物学の始まりの頃の話しをしましよいかね。僕は格さんの研究室にいたものだから、そこで経験と聞いた話などを交えてね。

1945年に戦争が終わって、世界的に見て次の問題は「生命体が示す諸現象がどのような原理で営まれているのか?」「生命体も物理化学ですべて説明し盡せるのだろうか?」「生命体には独特の原理が働いて種々の現象が現れるのだろうか?」といったことが科学者達の話題になっていたのです。格さんは東大理学部化学の物理化学の水島三一郎研究室の出身で、生命体を化学の立場から研究しようと動き出していました。東大の航空研究所が戦後、理工学研究所に改組されて、その第4部は水島研究室の流れを汲む人や有機化学の安藤鋭郎研究室の人によって構成されていて、いわば生物物理化学というような分野が一つのコアになっていたのです。その頃、外国の文献情報は東京では、日比谷に出来たアメリカ文化センター (CIAの図書館) などで得られ、いろんな分野の科学者達が利用していました。色々な勉強がしたいと思っている人たちが、勉強し始めた時ですよ。

【大石】 CIAの図書館ですか?

【三浦】 CIAですね。そこには、アメリカの雑誌がたくさん到着していて、それで、大学の人達がみんな見に行っていたらしいですよ。格さんももちろん行って、ある時、柴谷篤弘さんと初めて会うのだけれど、全然面識はなくても、読んでいた雑誌をちょっと見たら、もう何か、同志かもしれない、という感じがして、こっそりメモ用紙に「あとで話したい」って彼に渡したんですね。それが2人の最初の出会いだっただけだけれど、やっぱりそこには、ほかにもそういう関係の人たちが結構集まっ

ていたようです。

それから何か、やっぱりその連中が、何となく集まって何かしようということになって、例えば名古屋大学の沢省三さんとか、それから京大ではなくて、その頃、農林省の家畜衛生試験場にいた高浪さんとか、そういう人たちが集まってきたのです。

確かその頃、生物物理学会が出来上がったのは、非常に早かったですね。

【大石】 1960年頃ですね。

【三浦】 そうですね。

【大石】 内田久雄さんは、むしろ初め、生物物理でしたよね。

【関口】 生物物理は大澤文夫さんじゃない？

【三浦】 1960年、小谷正雄先生が立ち上げられた。

【大石】 その当時は、生物物理というのが、1つの僕たちのカウンターパートというか、一緒にやっていたよね。「生物物理」という名目で、科研費が何かをもらってきて、その中に僕達が入り込んでいましたよね。

【三浦】 あの頃、小谷先生と渡邊格さんは非常に激しい議論をしていましたよ。だから生物物理学会ができた時、格さんがその中に入る、という形ではなかったですよ。

【大石】 いわゆる分子遺伝、分子生物学は、その頃はまだなんというか、日陰者みたいな（笑）、様々な学部や研究所に分散して居候をしている状況でした。

【一同】 そう、そう、そう（笑）

【大石】 生物物理もそうだし、やっぱり両方とも新しい学問だったから、実際にそういう研究環境で頑張りましたよね。

【永田】 今、インターネットで調べましたら、生物物理学会は1962年5月に第1回学術講演会を開催していて、第2回は野田先生が、それから第4回が大澤文夫先生、第7回はまた野田先生が開催されて、初めの10回は、野田先生と大澤先生でそれぞれ3回ずつやっています。

【大石】 松原さん、その頃のこと、何かコメントしてもらえますか。

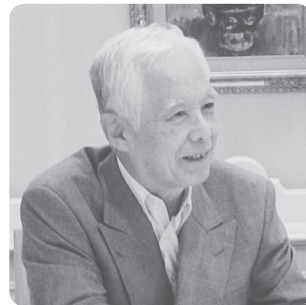
【松原】 今、分子生物学会がこれほど大きくなったのは、やはり渡邊格さんのパーソナリティーが非常に大きく影響していると思いますよ。

格さんがどうして物理学をやめて、いわゆる分子生物学に入ったかというのは、その心の動きを格さんがしゃべったり書いたりしたものがあるんですけど、生化学じゃない、それから生物学でもない、物質の構造学でもない、格さん、物質の構造学はさんざんやりましたが。それで、何か面白いことがあるのでは？ といった時に「ウブサラ学派」の考え方に共鳴しちゃったんですよ。どうして、強く興味を持ったかということ、やはりご自身が物理学をやっていたからなんです。アメリカに「ファージ学派」というのが出来て、そこへ行って新し

い勉強をしてきて、それは情報を中心にする学問であって、後に「分子遺伝学」という名前がつくものだったわけですよ。

分子生物学そのものは、初めから、物質構造と生物の情報の2本の柱、旗をちゃんと掲げてやっていたのだけど、物の構造のほうは生物物理の方でやればいやと、蛋白質やDNAのX線結晶解析なんか、1952年にもう行われていたわけですよ。だから、物理系の考え方をする人達と十分に議論するというのは、格さんのパーソナリティーに非常に合っているのです。結局、日本中の分子生物学に興味があるような人は、みんなそこに吸い集められて、年中、喧々諤々やっていたというのが、現在のこういった開放的な分子生物学！ いくらでも伸びていけるといった1つの重要な動機づけ、方向づけになったのだと思います。

それで、先ほど、関口さん、三浦さんがちょっと言われたように、なるべく学会（既存の）にしない、できるだけ議論を、議論に議論を重ねてやっていると、そういうスタンスでした。しかしその途中で、僕ら皆、非常に貧乏で（笑）、研究のために科研費が取れるということがわかってきて、科研費を取るためには、ある集団を作らなくてはいかん、だから、ただのシンポジウムで泊まり込みで議論しているだけではだめだ、といった考えから、学会を作ろうかという方向に進んだのだと思います。



松原謙一氏

今思い出してみると、同じ頃、私は大学院の学生で、1950年代の終わりから60年代にかけて、東大応微研に来ていたフランシス・ライオンが微生物遺伝学を講義していましたね。それから先ほど、お話に出た木原先生も「微生物遺伝学というのは、ものすごいパワーがあるから、これからみんなやらなきゃいかん」というようなことをおっしゃっていました。それから、それを受けてというわけではないけど、分子生物学シンポジウムをたくさんやりましたよね、非常に重要なメンバーで。医学系の人もたくさん集めて、新しい生物研究はどうあるべきか、という議論を盛んにやっていました。そういう流れが集まって、学会みたいなものをやりたい、だけど、なるべく既存の学会のようにはしたくない、という矛盾した出発だったのですよ。

私は75年に大阪に出てきて、それで76年には、中之島にみんなで集まって、分子生物学会を作るべきかどうかという議論のお世話をしましたね。200人ぐらい来ていましたかね。それでさんざん議論をして、その中で、分子生物学は何をやるべきか、今の構造系とそれから情報系と2つあるのだと、ね。

1972年というのは、ちょうどDNAの研究がいちばん盛んになる時代で、組換えDNAの技術が出る寸前です、その年の秋に出たわけですから。

【大石】 昔はDNAの研究が生物の情報の基だというコンセプトがなかなか出てこなくて、何で分子生物学と名乗るのか？ そういう議論さえありましたからね。ちょっと分野の外れた人達には、「分子生物」という名前をつけるのは何か僕たちが自分たちを自己主張するためのもの、なんて言われましたけれど、そのコンセプトがやっぱり遺伝子組換え技法の時にガラッと変わりましたよね。

1976年「分子生物学者の組織創設についてのWG報告」

【関口】 先ほど、1971年の宮島の座談会の話をしてしましたが、組換えDNA技術が出て、いよいよもって、学会創立の機運が高まるのですが、それに関係して、今日、重要な資料を持ってきました。

1976年12月の第5回分子生物学シンポジウムの時の、ワークショップ討議資料で、タイトルは「分子生物学者の組織の創設についてのワーキンググループの報告」とあります。1976年のその1年前に、分子生物学者の組織をどうすればよいかという問題について検討するためのワーキンググループが作られたのです。メンバーは、今日の参加者の三浦さん、松原さん、そして私。あと吉川寛さん、石浜明さん、志村令郎さん、溝渕潔さんです。数回の検討会をした結果、新しい形式の学会を作ることが妥当ではないだろうかと結論に達したと書かれています。学会創立直前の1971年の資料ですが、なかなか射っているの、ちょっと資料を読みますね。

○学会を作ることによって得られる実際的なメリットとしては

- ・分子生物学者の意見を研究体制や研究費の問題に反映させる。
- ・遺伝子操作やバイオハザードなど社会的にも関係の深い問題について対応する場をつくる。
- ・分子生物学は高校、大学の教育においても大きな比重を占めるようになってきているので、それらに対しても責務を果たす。

○デメリット

- ・同志的な交流が失われる。問題意識が希薄になって

しまう。単に学会を一つ作ることにしないか。……これらの多くは運営法を考えることによって克服できるのではないか。

○学会についての具体的な点は充分つめていないが、議論の中から出てきたことを今後のために記録しておく。

・学会の性格を考えれば、運営組織は弾力的なほうがよい。

・クラスターが連合して、年1回の総合的シンポジウムを開く。

・その他にテーマを決めて、いくつかのワークショップを開く（場所、時期は固定しない）。

・ジャーナル（日本語）は発行しない。Proceedingsを作り、国際的なcirculationに力を入れる。

・いくつかのクラスターを考えると、会の運営、特に運営委員の選出などにおいて配慮が必要。学会の名前は、「分子生物学会」でよいのではないか。

○ワーキンググループとしては、この提案を分子生物学シンポジウムにはかり、その段階で役目は終わったと考える。学会設立にあたっては、あらためて、設立準備委員会が作られるであろうが、予想される分野の中から考えて、委員の構成は相当広い範囲から選ばれる必要がある。

まあ、こんな感じですよ。この報告が第5回分子生物学シンポジウムで、第6回は1977年、そして1978年に学会設立準備委員会を開いて、その年の暮れに、第1回年會を岡田さんに開いてもらうわけですよ。1971年の宮島でほしい方向性が出来て、その方向性で格さんが決心して、だから具体的なことになるまで、時間は6年、かかったのですよ。

【大石】 うん、だから1970年に入って初めて、分子生物学ってものを公に名乗り出したわけですよ。僕たちは自信を持ったというか、なんというか。

僕は1964年からアメリカに居ましたが、やはり日本の分子生物学の歴史を見ますと、最初の渡邊先生をはじめとする流れに全く新しい学問があると感じ、それを何とかやりたいと、そのためには多少の不便とか、そういうことは気にせず、どこへ行ってもやれるだけ頑張るといふのかな。外国の分子生物学でもそうですが、イギリスなんかでも最初は屋根裏みたいなところで研究していましたよね。これはもう新しいサイエンスの宿命だと思います。だけど、みんながその情熱を失わないでやってきたっていうのは、非常に大きいことです。

それから当時、第1期の格さんのあと、すぐに富澤純一先生や野村眞康さん、そういう方々が外国へ行って、そして帰ってきて、これからはそういう研究が大事だということで、富澤さんは阪大に行かれて、ファージの講習会などをやられて、僕もその第1回講習会で勉強しました。

【松原】 実は、講習会を企画したのは僕なのです。当時ファージ講習会はアメリカにしかなかったのですが、日本でもこれをやらないと分子生物学は広がらないと考えました。高木康敬先生が「それなら、やろう」と言って、お金集めから始めたんです。それで講師を誰にといった話になり、それはもう富澤さん以外にないと。お願いしましたら「うん、やるよ」って、パッとやってくれました。有難かった。その後内田さんは「やっぱりファージ講習会の記録作ろう」って言って、何か書いておられましたね。

【関口】 1968年の講習会（1963年から開催されていた）だったかな。単に技術だけじゃなくて、考え方とか、みんな泊まり込みで議論した。非常に刺激的だった。当時としては非常によかったですね。

【大石】 そのころは、ピペットも1本1本乾熱滅菌してね。

【松原】 それはもう裏方は、すさまじいものだったですよ。

【大石】 大変だったですね。

【松原】 まずお金を集めること。富澤さんにはただで来ていただく。ピペットやシャーレはどうするかって、いちばんリッチだったのは当時、応微研だったので、2年間、貸してやる、って言われて。2年経って返そうかって言ったら、もういいよ（笑）って言われました。ピペットはすぐ洗って、次の日は乾熱、シャーレもすぐ洗って乾熱かける、缶に入れる缶がないから、もうかごととやっちゃう。シャーレは、ヤカンからまくとか、色々な技術を開発しましたよ。教室の連中は、もう大変な超過労。そこに富澤さんが頑張っていて、みんなを相手にしてガンガン議論して夜中までやっていたから、空気はものすごくよかったですね。裏方から校長さんまで全員「これが日本のためになるのだ」でやっていたから。その中から分子生物学のリーダーがたくさん輩出しました。

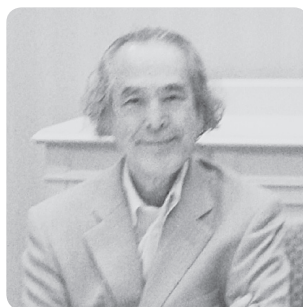
【大石】 そうですね。

【大石】 村松さん、その頃のこと、どうですか。

【村松】 65年に戻って来て、僕は内科医だったのだけど、やはり基礎をやろうと心に決めて、しかも動物を、動物の分子生物学をやろうと。

ただその当時、動物をやる人は日本にはほとんどいなかった。医学部の先ず内科でやろうかと思ひまして、研究やろうと思ってもとつても出来ない。それで癌研に移ったのです。でもなかなか医学部全体が、DNAとかそういうことに目が向いていない時代で、だから初めは四面楚歌みたいでした。そのうち、分子生物学会ができる頃になって、我々もだんだんにその中で認められて、それで若い人たちが入ってくれるようになった。

だから、いわゆる動物の分子生物学は、当たり前のことなのだけど、そこに入るまでには、やっぱり日本では



村松正實氏

ちょっと時間がかかったし、その時に分子生物学会が果たした役割っていうのは大きいよね。

【大石】 やっぱり医学部が、今は、病気の原因の研究もほとんど分子生物学になっているけれど、その時はやはりそういう動きがありましたか？

【村松】 「分子生物学」って言葉がね、やっぱり生化学の友達や先輩も皆かいかぶっていたところがありましたね。

【大石】 認知されるのは、やっぱり1970年頃からですか。

【松原】 それはもう間違いなく、組換えDNA実験からですよ。それまでは、ただの大腸菌学だと思われていた。だから、お医者さんは全然面白くなかったわけです。

【大石】 岡田先生、植物のほうはどうですか。

【岡田】 僕は植物に思われているけど、植物ではなく植物ウイルスです。学生時代から蛋白質化学をずっとやっていて、分子生物学に入ったのは遅く、1964です。阪大医学部の癌研究施設からオレゴン大学のストライジンの研究室に留学し、T4ファージのフレームシフト変異リゾチームのアミノ酸配列を決めて、遺伝暗号の世界から分子生物学に入りました。ちょうどその頃、農水省に植物ウイルス研が出来て、木原先生から戻って来ないかといった話しがあってね。よく覚えているのだけれど、木原さんが、今度作るのは植物ウイルス研究所である。だから動物ウイルスをやってもらっては困る。でも、バクテリアは分類学上植物だから（笑）、バクテリオファージの研究をやっても宜しいって言ってくれましたね。そのつもりでミュータントをいっぱい持って帰ったのだけど、そういっても全く設備がなく温室ばかりだね。所長はそうのように言ってくれても、農林省はバクテリオファージを植物ウイルスとは思ってくれないから、なかなか仕事ができなくて、それで仕方なしにTMVに変わったのです。

その頃、格さんは慶應におられて、助教授は春名一郎君で、彼とは赤堀研で一緒だったので、それで彼と一緒に、RNAファージもRNAウイルスも同じだろうと思って「タバコモザイクウイルスの複製を一緒にやろう」ってことになりましたね。その時に春名さんに「格さんに挨拶しない？」といわれ、初めて格さんに会いました。だから僕は渡邊格さんとのつきあいはおそいのでね。そ

うやって何となく分子生物学へ入っていったのです。

阪大医学部癌研の頃は周りはお医者さんばかりで「大腸菌をやって何で癌が治るのだ」と、そういう感覚で、たぶん医学部の人や、あるいは新しい分子生物を知らない人は、分子生物学はあの頃、大腸菌とバクテリオファージの学問だったから、生化学の中の一部分、としか考えていなかったのではないかと？ どの医学部もそういう雰囲気だったのではないかな。

【大石】 松原さんが先ほど言われたように、いわゆる遺伝子組換えの技術を使った応用研究ですか、それを使った様々な新しい展開が急速に1970年代からあったわけですね。技術的な開発がこれほど進むとはね。松原さん、そのへんはどうでしょうか。

【松原】 組換えDNAの実験が出たのは72年の秋ですけど、69年、70年ぐらいに、ステントとかみんなが「分子生物学は終わった」と。実は、大腸菌学は終わった、ということでした。それで、みんな、大腸菌の次のモデル生物ですよ。モデル生物で、分子生物学の第1期は成功したわけです。プレナーは裏庭に行って線虫を取ってくるし、ネズミをやる人もいれば、ハエやユスリカやるとか、みんなそれぞれ、われこそはモデル生物を作ろうとしたわけですよ。だけでも、なかなか上手くいかなくて、その頃に悲観論も出てきて、格さんも「分子生物学は終わった」なんて言っていた。その後、「第1期が終わった」って訂正したんだけど、ね（笑）

厭世的な空気がはびこっていた時に、その72年の秋、組換えDNA実験の技術が出た。それで、世界中で火がついた！ って感じでした。これはもう自慢するわけではないけど、日本では私が最初なのです。なぜかっていうと、ポール・バーグが使ったのは、私のプラスミドだったから。私はレプリコンの研究していたのだから。これで動物のDNAが大腸の中で増える、あるいは動物の中で大腸菌の遺伝子が増える、それやろうっていうので、これまた高木先生「よし、やろう」というので、即、取りかかったわけです。この組換えDNA実験のインパクトが広まるのは、その後、国内では5～6年はかかりましたね。

世の中では、なんとなくキメラ動物ができて、恐竜みたいなのが生まれてくるのではないかとPRされたりして。それできちんとやろうではないか、というので、文部省、科技厅などの人達を説得してその問題に対応する組織作りと、それからあとはガイドライン作りですね。渡邊格さん、富澤さんを中心に、組換えDNA実験施設を全国に広めてね。講演行脚ですよ。

それが医学部に広まったのは、やっぱり1970年代半ば後、阪大から始まったのです。初めは危険だとか流行だとか、いろいろ言われましたけれど、結局、何でも、DNAで研究できる、ということになって、70年代終わ

りには、やっと日本でもこれがバイオテクノロジー開花の引き金です。

【大石】 遺伝子組換えの技術というのは、確かにいろんな議論はあったけれども、やはりあれで、分子生物学に対する見方が変わりましたよね。バイオテクノロジーという、今まで基礎科学にあまり興味を持たれなかった産業界の人や、第1次のバイオテクノロジー世代で、安全性とさらにその有効性も含めてたくさん議論したので、日本だけではなくて、アメリカもみんな同じですけど、分子生物学が一般化したといいますか、非常に多くの人々の興味を呼んで、それから、その頃から農学部や薬学、他の分野の人が、これに興味を持ったという面で大きなインパクトがありました。

アシロマ会議

【松原】 アシロマ会議（*1975年、カリフォルニア州アシロマで開催された遺伝子組換えに関するガイドラインが議論された会議）は、やはり画期的だったですね。一握りの科学者だけでなく世界中の分子生物学に経験のある人、それから法律、政治家、経済、それから特許の専門家ですか、200～300名いたのではないかな。そこで「これでやるのだ」と決まり、もうアメリカはすぐにガイドライン作りに動きました。日本は当時、まだまだものすごい反対運動で、消費者運動なども一緒になって大変でしたけれど、ガイドライン作りが動き出して、ようやく動物に手が扱われるようになった。医学部が、それからバイオや薬が、それから農学が、みんながこのような中に入らざるを得なくなったというので、分子生物学の花盛りは始まったのではないかと思うわけです。

【大石】 そうですね。僕もそのころ帰ってきたのですけど。すでに、高浪さん、吉川さん、広田さんなど、わりあい長く海外におられた方々がぞくぞく帰って来られていました。

【松原】 80年代半ば頃まで、第1次バイオブームが続いたと思うんです。これで薬が出来るからと。お医者さんは、この技術を病気の遺伝子に使えるとそれでメカニズムがわかると。製薬企業もものすごいビジネスになるというので、みんな夢を持って思いきりやって、80年の中頃になって、インシュリンだとか、成長ホルモンだとか、面白いものがみんなクローニングされてしまって、ちょっと中だるみした時代がありましたね。

【村松】 そうだね。

【三浦】 すみません。ちょっと1つ付け加えさせてください。

分子生物学会を立ち上げようと格さんが決心した時、これはむしろ内田さんが、かなりそういうような対応を



されたかもしれないけれど、研究費を取ることに、そのためにも、やはり学会が必要だったと。学会がないとステージに上がれない、というか、土台がないとね。

【大石】 今、科研費の細目の中に「分子生物」はありますか。

【長田】 あります。

【大石】 あるのね。前はなかったんですよ。確か、生物物理とか遺伝学とか。

【三浦】 最初はそうですね。

【大石】 微生物学とか、動物学とか植物学とか、あちこち、行っていたから。

【村松】 だから、そういうやっぱり学会を作ってしまった。

【松原】 いや、学会ができたから、細目ができたのです。

【大石】 確かに、しばらくは分子生物の細目はなかった。

【関口】 学会ができたから、細目ができたというわけではないと思いますよ。あれはもう、とにかく全体的な流れで、業界も大学も文部省も、ね。大きな流れの一貫で、やっぱり必要ということになったのでしょうか。

【村松】 業界が動いちゃった、と。

【大石】 だいたいあの細目は、もともと大学に対応するそういう学科がみんなありますよね。動物学、植物生理、生物物理学……。分子生物学というのも今でこそ幾つかありますけれど、当時はほとんどなかった。確か名古屋大学が最初で、それからどんどん増えましたけど。

【関口】 確かに昔は、学会推薦で科研費審査委員会を出していました。

【大石】 学会が基準だったでしょ。

【関口】 うん。

【大石】 審査委員は、今でもそうですか？

【長田】 いえ、今は、審査委員候補者に関する情報を出すだけで、学会が直接、委員指名することはありません。

【関口】 分子生物学会を作った頃には、まだまだ当時、生物物理学会におんぶしていた。生物物理がもらった研究費の一部をもらうという、あるセクションでね。確か、学会創立趣意書の一文に、研究体制を考える母体となると、ありましたね。

【三浦】 格さんは相当やっぱり、現実的のことをも考え

て、決意したのだと思います。

分子生物学会が出来た頃

【大石】 いろいろと宮島の座談会のことや、学会創設のワーキンググループのお話をうかがいましたが、そろそろ、分子生物学会が出来た頃の話に移りましょうか。

分子生物学会創立の前に、分子生物学シンポジウム、その前に、核酸シンポジウム、生物物理学会のことにも、触れましたけれど、学会を作ろうということは必然的な流れであったことがわかりましたが、普通、学会を作るというのは、きちんとした格好を作って、きちんと申請してやるのだけれど、分子生物学会の場合には、最初はまさに任意の団体から始めたのですね。極端に言えば、ママさんバレーボールクラブや、どこどこを歩こう会と、一緒の形で始めたのだけれど、現在1万人を超してしまうとさすがにそういうわけにはいかなくて、やはり、ここで実際に正式な学会（法人）にしたのですね。

やっぱり分子生物学者のいいところは、形式にこだわらないで、実質的なものだけをもうとことん追究する、という点ですね。学会を作るにあたって、旧来の学会とは違ってそこが重要だったのですよね。どうですか、松原さん。

【松原】 議論する場を作るというのが学会の出発点だったから。何々派を作るというのではなくて、そのところがよかった。

【大石】 そうですね。

【松原】 どこまで行っても議論がしたいんだけど、やはり学会になるとフォーマリティーが出てくるから「もう分子生物学会やめようか」なんて、格さんずいぶん言っていましたよ（笑）現実に分子生物学会を現代風にきちっとした形にしてくれた手腕を示したのは、内田久雄さんです。本当に内田さんのおかげできちっと全部動いている。

それから本当によかったと思うのは、普通、何か学会を作ると、その母体というのがだいたい限られていますよ。極端に言えば、医学部のどこどころか、理学部のど



こどことか。ところが分子生物学というのは、生物全部の基本的なものを追究するという事なので、農学からくる、医学からもくる、理学のどどこ、そして薬学からもくると、もうすべてがありますから、そこでは派閥もできようもないしね。それから、みんな元々が、その背景というか、そもそも飛び出した人ばかりというのは大袈裟ですが、夢を持って、そして実質的にとことん頑張ると！ そういう人が多かったですね。

【関口】 初めに苦労してきたからというわけでもないけど、新しいものがあれば、公平に評価されて、みんなが感激する。新しいものを持っていると「お、すごい」ってね。それで、よってたかって議論する。だから偉い人がしゃべろうが、博士課程の学生が話そうが、そんな差別は全くなし。

【松原】 構造の議論をしているところに情報の話をしたり、ものすごく面白かったです。

【三浦】 そうですね。もっと前に、僕もそういう経験があります。大学院の2年生が終わった頃で、核酸研究会というところでしゃべったのですが「すごい話をしたね、君は」と受け止められたのを、僕はちょっと、何ていうかな、すごく驚いたわけです。それが励みにもなりました。とっても大事な原点ですよ。

【大石】 分子生物学会は、やっぱり違うのですよ。何かがある。それは何かかなと思って。関口さん、何だと思えます。

【関口】 それはやっぱり若い人が自由に発表して、その場では未完成だろうけれど、限りなく活発に、そしてまた、ワイワイ言いながら議論して、また出せる！ と。これがいちばんサイエンスの進展にはいいんですよ。核酸シンポジウムの話が出たけれど、私なんか、三浦さんも、そこでそういう形でしゃべって、それで友達になって、色々なことがありましたね。

結局、博士課程の学生などは、やっぱりそういう場で頑張って発表して、それをほんとは批判されることがうれしいのですよ。生化学会などは、参加してもそういうのはなかなかないし、生物物理学会などは、今、どうなんですかね？

【大石】 村松さんは、医学畑で生化学会の重鎮だけど、分子生物学会と何が違うと思えますか？

【村松】 はっきり言うと、いい意味でも悪い意味でも、伝統というのがもう少し長い、生化学会はね。それで、昔の偉い先生の流派があって、という感じでしたね、医学ってという観点でね。そういうところに入ってないと、なかなか生きていかれない？ (笑)

【岡田】 それは、重要な問題？

【村松】 それはもうしょうがないです。

【大石】 就職とか、昇進とか？

【村松】 そう、そう、そう。非常に関係する、そういうことがある。分子生物学会はそういうことが、ほとんど

ないのですよね。

【大石】 僕が会長をしていた時に、当時、やっぱり生化学会から合併の話がありました。今でも色々あるみたいですけどね。僕も自分の一存で答えられないし、富澤先生や皆さんに相談しましてね。当時もやはり同じでね、皆さん、合併にネガティブでしたよ。

せっかく今までこういうふう自由闊達にやってきましたから、村松さんもちょっとおっしやっただけど、あえてここで、合併うんぬんを考える必要はないのではないかと思ったわけです。分子生物学会には、やはり何ていうか、ほかの学会とは違う特異なアイデンティティーが生き続けていると思うのです。皆さん、どうですか。

【関口】 格さんもよく言っていたけれど、ほかの学会でしゃべったことを分子生物学会年会でしゃべっていいのではないかと。何ていうのかな、それぞれの他の学会ではそれぞれの分野に応じた研究発表をしてもらって、分子生物学会ではその人たちが集まって違う分野の人と交流して新しいものを作っていけばいい。色々な学会に入っていて、なおかつ分子生物学会で議論するのがいいと、私はそういう風に思っていたわけです。

若い人たちにもそういう風に言ってきたんですけど、何分、今は、分子生物学会が自分にとって唯一の学会であるという、そういう人たちが最近是非常に増えていますね。

分子生物学会が持っている特質、アイデンティティー！

【大石】 さて、そろそろ後半に入ってきましたので、これから分子生物学、分子生物学会が今後どうあるべきか、そのような話しをしたいと思います。

そこへ行く前に、やはり分子生物学会の持っている特質といますか、それをもうちょっと掘り下げてみますと、実は分子生物学会は、日本のほかには、あまりありませんね。不思議に思うんですが、どうして日本でこのような分子生物学会という学会があるのかということなのですけど。

これは、日本での学問の体制と僕は関係があると思っています。外国では、わりあいフレキシブルで、もちろん学閥みたいなものもありますけど、例えば動物をやっている人、医学をやっている人、そういうこと自体が、もう分子生物学が基本的なコンセプト、新しいコンセプトであって、それをあたりまえのように研究に取り入れていって、どんどん変わってきています。日本の場合、どうして分子生物学会を作ったかというのは、松原さんもちょっと触れられましたけれど、やはり作らざるを得なかったということがあると思うのです。長い間同じ対象、手法で研究しているところに、分子生物学的な思考

方式、技術を持ち込もうとしても、日本ではそれはあまりにも大変な話で、それよりは作っちゃって、むしろこっちで、そういうことをやってしまおう！ と。

僕は分子生物学というのは「分子生物学」という学問ではなくて、これは生物学の1つのある発展段階の大きなジャンルだと思うのですが、本来はその個々の研究領域によって、分子生物学をそこに取り入れて発展していく、というのが本来の行き方だと思うのです。ただ、日本の場合にはそうじゃなくて、分子生物学会という新しい会を作った。作らざるを得なかったのか、偶然できたのか、僕はそのへんが非常に興味ある問題です。松原さん、どう思います？

【松原】 それは、議論できるから、派閥がない、それがいちばん大きいのだと思います。年齢も関係ない、出身も関係がない。それで、面白ければ面白いと。それですぐに寄ってくると。こんな愉快なことないじゃないですか、一生懸命やった結果をまた議論して。

【関口】 要するに、それが日本にはなかった。

【岡田】 ない、ない。

【大石】 だから1つのアンチテーゼとして、こういうもののコンセプト、分子生物学会というのは、非常に大きな大事なポイントだったと思うのです。

【村松】 ほんとに、日本になかったデモクラティックな学会。

【関口】 本当の学会ができた。



【岡田】 日本の研究室というのは、特に医学部などは色々な慣習があったけれど、分子生物に行っただけの人というのは、みんな、アメリカで勉強してきて、そういう人たちが帰ってきたでしょ。アメリカはもう教授だろうが何だろうが、ワーワーワー言いあっている。そういう学問の雰囲気というのを身に着けて、それで日本へ戻ってきて、ただ、みんなまだ若いから、戻ってきててもボスでないからね。その助手とかね。あの頃、格さんだけが歳いってて(笑)、あとはもうほとんど若造だけだった。日本へ戻ってきて、ワーワー研究室で言えるかっていうと、やっぱり日本の風土では、なかなかね。「おまえ、大腸菌やってて、癌が治ると思ってるのか」って言われる。そういう人たちが、結構集まってきて、いじめられている連中

が集まって(笑)慰めあいながら、それが元の始まりだと思っている。分子生物学シンポジウムになっていって、そして学会が出来た。

僕は第1回の年会をやらされたのだけれども、学会といっても、基本的には分子生物学会と、名前を変えたシンポジウムの延長だったような気がしている。第1回の年会運営はほんと未知からの出発で、どれほど発表が集まるかわからないしね。分子生物学シンポジウム時代は、みんなの話を聞いて、みんなでディスカッションをしましょうと。だから学会になっても、そのプログラム委員会を作った時に、みんなの講演を聞かなきゃいけないと主張する人が多くて。つまり学会会場は1つでなければいけないと。結局、予想以上に演題が集まってしまい、2会場になったのだけど、会場が2つになることを、みんなに説得するだけでものすごく大変でした。

学会として可笑しかったのは、関口さんも言ったけれども、よそで発表したこと、生化学会でも農芸化学会でも、生物物理学会でも何でも、全く同じことを話してもいいと。最初とはとにかくディスカッションできるやつをたくさん集めて来るようにと。だから非常に活気だけがありました。

象徴的な話があって、僕の友達で非常に保守的な学会(学生も先生も学会といったら、スーツ、ネクタイできちりと)におった人が、初めて仕事でバイオをやるようになって、生化学会へ行行って、それから分子生物学会に参加して。生化学会へ行ったら新宿の街を歩いているように思って、次に分子生物学会に行ったら渋谷に来たかと思ったそうです(笑)

【三浦、関口】 うん、うん、全然違う。

【岡田】 分子生物学会というのは、明治から続いているような伝統的な学会の人から見れば、渋谷の街を歩いている印象を与えるような学会だったわけだね。ただ、残念ながらやっぱり、始めたころ若かった人がだんだん年取っているから、やっぱりどうしても、そう、うまく言えないけど、努力しないと生化学会みたいになってしまいうよね。

【村松】 僕が付け加えると、そういう性格をよく現わしているのは、年会を主催する「年会長」も、僕の時ぐらいまでは「年会長」と言わず「委員長」と呼んでいましたね。確か、会長とは言われなかったし、その後しょうがなくて「年会長」になっちゃったんでしょうね。

【大石】 そういった非常に自由なところが、若い人にアピールしたのだと思いますよ。若い人もみんなも、やはりサイエンスをやる時には、自分の言いたいこと、ボスの先生との反対意見も言いたいとか、そういうところは大事ですよ。

分子生物学会は、一時、会員の平均年齢が20代だった時もあるんです。みんな若いから、懇親会をやっても

一瞬に食べるものが無くなってね。初期に近い頃に(1986年、第9回年会)、遺伝学会との合同大会をやったことがあるけれど、懇親会で食事を出すのだけれど、遺伝学会ではいつもは食べるものが残るっていうのに、一緒にやったら、あっという間に食べるものがなくなっちゃってね、「何だ、あの連中は(分子生物学会)」って(笑)

それで、他の学会の人から、どうして若い人が多いのか? と色々聞かれましたね。これ、会費が安いこともありましてね。分子生物学会は、ほんとにもうずっと、学生会費がすごく安いのですよ。ずっと2,000円で、30年経った今でも3,000円ですからね。ほかと比べたら、正会員の会費も安いですよ。ちゃんと節約して、懇親会をやるかやらないかも、年会長が決めればよくてね。やりたくなければやらなくてもいい。だから懇親会をやっていない年会も何度かありますよ。自由なのです。ちょっと考えようによっては、すごくいいかげんなところもあって、でもその良さを大事にしてきた。もともと、きちとした法的な根拠もなかったからね。

だけど、サイエンスというのは、ある側面、非常に自由であってね、できる限り、それがいいっていうことです。

【松原】大きくなると、普通だったら分派的なものになってしまいますよね。例えば脂質派とか、タンパク派とか、発生派とか、そんな風になるはずだけど、これほど大きくなっても分子生物学会を保っているのは、分子生物学が全部共通言語だということが大きいと思うのです。同じ言葉でみんながしゃべっている。これは非常にいい。偉い先生の数だけ学会があるというような分野でもないしね。1万数千人を越すなど、初期には思いもよらなかったことですけど。これだけ共通言語が生命科学全体に広がったということ、運がよかったという部分が大きいですね。

あとは、先ほど言ったように議論をする、将来像をしっかり持ってやると、そういう運営を心がけました。

1978年、第1回年会の開催

【関口】しかし、第1回年会は、岡田さんご苦労されましたよね。

【岡田】最大の難関となったのは、応募された演題の採否でね。分子生物学シンポジウムの時代は、その発表する内容もシンポジウムにふさわしいものばかりであった。しかし学会となり、演題を公募するとなれば、どんな演題が応募されてくるかわからないしね。演題募集の通知に「発表申込みの採択については本会に一任下さい」といった一文が加えられたのだけど、予想を上回り申込みがあって、日程も考慮して、相当数の不採択演題が出

たのです。そうしたら、不採択となった人達から抗議が相次いでね。シンポジウムでは主催者の考え方で演題を選ぶことが出来るけれど、学会になったのだから会員すべてに発表の権利があるはずだ、というのが主張でね。不採択とした演題の中には、京大全共闘のメンバーのものがあつたりで、学会粉碎予告の電話を受けたり、もう本当に大変でした。

【関口】プログラムを印刷し直したよね。

【岡田】一旦、印刷して全員に送ったのです。そのあとで、もうこれ色々あって、粉碎されちゃってね(笑)その頃まだ全共闘の学会粉碎の余波があって。僕のところへガンガン電話がかかってきて、こっちから切ると、逃げたとか、議論しないとかわかれるから、とにかくこっちからは電話切れなくてね。かかってくると長い時は3時間ぐらいね。それが何回あったか忘れたけれど。

78年の11月3日に、再度プログラム委員会を開催して、渡邊先生の決断ですべて採択に決まって、プログラムを刷り直したのです。「プログラム委員長が間違えました」と言っただけで僕が責任を取って、プログラム委員会代表を辞任して、形だけ渡邊先生に替わってもらった。格さんは実務は何もしなかったから……(笑)。まあ、そのようなことを乗り越えて、1978年12月5日の第1回年会を迎えることが出来たんですよ。

【関口】だけど、格さんは、決断しましたよ。決断して、それでプログラムも刷り直して。

【岡田】うん、そうだね。だけれども、演題全部を採って、そうすると、会場の時間が足りなくて、これはもう間際だからね。それで仕方なしに、夜7時か8時まで、やっていますよね、プログラムを見ると。

分子生物学会この30年と、将来に向けて!

【関口】まあ、それだから、初期の学会と今の分子生物学会は、いろんな面で違うのですよね。

【大石】30年経っていますからね。

分子生物学会の初期の面白い話をありがとうございました。この30年間のことを振り返ってみて、皆さん、印象的なことや、あるいは将来のことについて、何か言っていただけますか。

【大石】では、私からちょっと言わせてもらいましょう。1つは、順調に伸びてきたということですが、数が大きいのがいいか悪いかは別として、これだけ多くの人たちが関心を持ってきていること、特に若い人が参加していることは、非常に結構なことだと思いますし、我々としても、もうそれは嬉しいことです。

あともう1つ、財政的にも非常に安定しましたね。それも非常に大きなことです。僕が年会長を引き受けた時、

第16回(1993年)かな、あの頃は、まだやりくりも大変でね、それで、企業主催のランチョンセミナー、今のバイオテクノロジーセミナーですか、導入したんですよ。普通、学会をやると皆さん、賛助金集めで苦勞されるのだけれど、昨今の状況はわかりませんが、分子生物学会は、わりあいに安定しているのではないですか。当時、バイオテクノロジーセミナーをやって、企業からのお金を学会全体の中の収入に充てることに反対意見もあったのですけれど、その結果、学生さんなども、ずっと安い参加費が続いているのだから、よかったのではないのでしょうか。

あまり賛助金のことなどに苦勞することなく、年会長は本業の学会の中身、サイエンスのことに集中出来るのでしょ？

【長田】 はい。そうですね。

【大石】 それは非常にいいことですよ。

それからあとは、生化学会とは、昔から合併しないか？という話があって、今、確か、会員数は逆転しているのではないですか。

【長田】 逆転しています。向こうは約1万人、分子生物は1万5000名から1万6000名です。

【大石】 なるほどね。合併問題をどうするかっていうことですね、特に将来は。若い人などに聞くと、両学会でしゃべると言っていますかね。

【村松】 今の合併の話ですが、以前にもそういう話があったような気がします。

ただ、例えば、生化学会だと、食品や、栄養学的なものとか、リビドの一部分とか、分子生物学会ではあまり興味のないようなものも、生化学会には結構あるんですよ。だから、実際、本当に目指すとしても、それはなかなか難しいと思います、色々。

そういうことがあって、そう簡単には、ね。僕はけっして、いいとか悪いとか言っているのではなくて、簡単に一緒になってしましましょう、と言うには、非常に難しい点があるのかもしれない。

【大石】 この20年来、何度かそのような話が出たり、生化学会の人と会ったこともありますけれどね。今、何かやっぱり、分子生物学会の持っているアイデンティティーというか、そういうものが失われているように感じている人が、非常に多いですね。だから僕は余計に、初心、当時のスピリットを大事にしたいと、ね。皆さん、どうですか。

【関口】 会誌というか、ジャーナルの考え方ね、あれも1つの大きな違いでね。生化学会は、ちゃんと毎月、和文誌を出していますよね。それから、英文誌JBだって、出しているし。

分子生物学会でジャーナルをどうするかっていうのは、いちばん最初からの検討課題であって。編集幹事？

ですか、学会創立の頃から、会誌はないのだけど編集幹事はもともとからあってね。編集幹事は当時は何をしたかという、ジャーナルを出すべきかどうかを先ず考えるのが編集幹事の役割で、それを3人か4人でやったと思います。結局、財政的なこともあるし、それから、何というか、新しいジャーナルを出すならば、本当に国際的に役立つ、そういうものでないと意味がないと。

結局、1つ区切りとなったのは、富澤さんが帰ってこられて、富澤さん自身も少しそういったことをやっていきたいという意思もあったのですね。富澤さんだったら、そういう新しいことが出来るだろうと、しかし富澤さんにはやっぱりフリーハンドでやってもらったほうがいいというので、ちょうど私が会長をやっていた時だから(第6期：1989.4~1991.3)、それから、実際の発刊(1996)まで、5~6年かかりましたね。

当時の評議員会で、富澤さんに実際にジャーナルを出してもらうことが決まって、ただしそれは、分子生物学会がある程度の財政的な支援はするけど、学会とは一応独立してやってもらおうと。そういう基本的なことを決めて、あとは富澤さんが実際に色々やるように交渉をしたり、雑誌の名前を決めたりね。富澤さんのイニシアチブでやってもらうという、そういうスタートでした。

【大石】 うんうん。ジャーナルの準備では、富澤さんがどういうわけか私を指名してきましたね。それで最初、一緒にアメリカへも行ったりしました。

関口さんが言われましたが、富澤さんの考えはやっぱり日本から発信すべきだ、と。いくつかポイントがありまして、1つは、やっぱり日本から発信する。日本のアイデンティティーですね。日本の分子生物学がいつまでも外国に頼っていたら問題があるということです。それからもう1つは、著作権等の問題。それから、全く新しい国際誌を作ることは、負担も大きくて、経済的なことだけでなく、英語から何からね。ただ富澤先生が非常に積極的で、それが本当に有難かった。

「Genes to Cells」については、本当に成功したか成功しないかっていうのは、これからの問題でこれからが大事です。出すからにはいい雑誌を目指す、それが大事です。

僕らが「Genes to Cells」を出す時に、「The Journal of Biochemistry」のほうは、当時、文部省刊行補助金を数千万円もらっていたこともあって、生化学会が、われわれのジャーナルをJBと一緒に出しましょうという話もあって、しかし僕らは当初の企画を押し通した。

今、「Genes to Cells」の予算上のことはどうですか。

【長田】 編集関係で約1000万円。オンラインアクセスで440万円です。しかし、編集長と編集幹事の努力で、もうじき、きちんとした契約改訂がなされて1000万円のうち、800万円まで、出版社から戻ってくるようになり

ます。

【大石】 それはいいですね。

あと、今とても議論されていることが年会のやり方ですね。昨年12月、久しぶりに監事として理事会に出たけれど、色々議論されていましたね。生化学会との合同開催のことや、それに場所も、横浜と神戸に固定されてしまっていますね。

【長田】 はい。年会はあまりに大きくなってしまったので、2001年から始まった、地方都市をまわる春季シンポジウムはとても上手くいっているように思います。今年5月に札幌でありまして、市民公開講座を含めて、600名を超える参加者でした。

【村松】 春季シンポジウムはだいぶ好評だったようだね。いろんな人から話を聞いたよ。

【関口】 ところで、生化学会との関係だけど、実際はどうなっているの？



去年の年会が合同開催で、今年も一緒の開催ですよ。僕は、昨年、合同大会の懇親会に出たけど、生化学の重鎮の人が多くて、分子生物学会の人にはほとんど会えなかったなあ。年会を一緒にやること、会員の意見はどうなのですか。

【長田】 開催形式ですが、昨年は合同開催、今年2008は私が年会長を務めさせていただきますが、合同開催です。来年は単独開催で、その次の2010年はまた合同大会でやるのが、昨年末の理事会で決まりました。開催形式は試行錯誤で色々あるのですが、しかし、年会の企画を最終的に年会長にすべて決めてもらうということは、昔と一緒です。

確かに両学会は、その体質も雰囲気も全く違うものを持っているように思いますが、分子生物学会の自由闊達な気風を損なうことのないように、十分に配慮して企画したいと思っています。関口先生から懇親会のことが出ましたが、今年のBMB2008では、若い人が懇親会に参加しやすいように、色々工夫しています。実際に、生化学会あてに種々の要望を出しましたし、僕は分子生物学会の空気を尊重したいです。

【加藤】 僕は学会のあり方や合併問題と、年会開催のことは、別次元で考えたほうがよいと思います。10月～

12月の時期に、これだけの規模の学会が2つあることは、地方の研究室などは相当の旅費負担のようで合同開催がいい、といった声も聞くことが多々あります。

【大石】 出張旅費とか、そういうことは、また別問題だなあ。年会においても、年齢とか立場、学閥、そういった一切のしがらみを排除し、自由にとことん議論できるのが、分子生物学会の最大のいいところなのだから、年会では、ともかくそれを無くしては困る。一番大事なことは、そのスピリットを大事に育てていくことです。

【永田】 一昨年、私は前期の庶務幹事として、2006年IUBMBの準備会議、組織委員会にずっと出席していましたが、確かに、両学会の根本的な体質の違いを感じました。だから、分子生物学会のスピリット、それを失わないように、努力し続けることが大事だと思う。

【大石】 そうだね。横断的に進めて、自由に！そして議論すると。それが分子生物学会の原点です。

【三浦】 心ある人はわかっていますから。

【大石】 そういうことで、最近の状況の話しまで出ましたが、色々な検討課題はあるけど、本質的なところでの分子生物学会、それ自体の変化というのはなかったと、私は思っているのです。いちばんの問題は、これだけ生物学自体が変わってきているので、そして、学会自体が非常に巨大化した今、今後このままでいいのかどうか？これは、もう若い人達が考えて決めるべきだと思いますが、せっかく皆さん方に集まってもらったので、何か学会の将来についてのコメントを頂ければありがたいです。どうですか？

【大石】 関口さん、どうですか。

【関口】 これからのことは、私は発言しないほうが。我々の世代が今になって言うこともないでしょう。

【長田】 いえいえ、ぜひ聞かせてください。

【関口】 結局これだけの数になってしまったからね。マスというのは、やっぱりすごい。それをどうやってやったらいいのか。過去のプログラムを、ずっと思い出してみたら、その時々 of 学問の流れで、例えばある時には、ある分野がワットと増えたり、ある時はこうとか、今はもう全般的に色々な分野で増えて、そして定着している。しかもその中で、シンポジウムはどうしても限られた人しかしゃべれないから、ね。本当の勉強になるような会がほしい。

【長田】 可能な限り、ディスカッションをできるようにしたいと思っているのですけど、ね。

【関口】 そこをどういう風にすればいいのか、ということ。

【大石】 松原さん、どうですかね。

【松原】 数が多いのは、非常に有利なことが多いのですけど。

先ほどの話の中で1つ出なかったのは、生化学会は、

IUBSとか何とか、国際対応もきちっとやるのですが、分子生物学の初期の人はみんな横着で、そういうこと一切やりたくなかったから(笑)全部おんぶしてきたわけ。そういうの、全部やらされたら、かなわん。年会と雑誌のことだけやると! だから、そのかわり何をするかっていうと、一生懸命に研究をして、最大限の時間、ディスカッションをやりたいと思っているけど、それがこの頃でできなくなりつつあるので、何か努力して知恵を出さないかね。

つまり学会の中に、分科活動を作ってほしい、というわけではないけど、自然にこういうようなディスカッションする場が必要ですよ。ウイルス討論会とか、〇〇研究会とか、そういう同志的な集まりが、分子生物学会の中で自然にできてくる時代に、今、向かっているのではないですか。

それと同時に私が心配するのは、今は、そういう大きな研究の方向づけをお金が決めていることです。お金はだれが決めているかという、何か学問の必然性から出てきたのではないところ辺りから決まっている要素がかなり強いように思う。そうすると、そのお金を取れるところの周辺に何となく来るというようなところがありますから、本当に議論できる人が議論して問題に当たってほしい。

重要なのは、学会は既成の仕組みの中に組み込まれている人を使って何かをやるのではなく、純粋に仕事をしている人、そのような仕事ができる人を、学会はエンカレッジするのが大事だと思うのです。そのように思っている人が多いのではないかなあ。がん研究にしても、形態形成にしても、発生にしても、情報にしても、ゲノムにしてもね。

【大石】 そうかもしれないですね。

【松原】 どうやって発掘するかというところが、大事ですよ。たとえば、ミニマムレポートで、それはちょうど分子生物学会ができた頃みたいに、そういう形にまたそれぞれの分野へ持っていけるような工夫をしてほしいと思います。

【関口】 泊まり込みのセミナー、ね。そういうたぐいのものを、学会がイニシアチブを取って、幾つか作って、セレクトして、泊り込みで若い人に100名ぐらい限定で来てもらって、そういう企画を、分子生物学会がやってみるのがいいかな。

【長田】 特定の班会議がその一つの形と思いますが、最近はその班自身がなくなってきました。そうすると、やっぱり、学会が何かそういう新しいことを?

【関口】 特定の班会議は、もう既成の人の集まりだから、大学院クラスの人が行って、なんとかしようとか、なかなかできにくいですよ。だから感じとしては、合同カンファレンスの雰囲気を持ったようなものを、少しテ-

マを設定してやるとかね。ともかく若い人たちが個人的接触を持てるような泊まり込みをやってほしい。学会が果たす重要な役割ですよ。

【大石】 村松さん、何か。

【村松】 今の関口さんの意見に大賛成ですね。そういう機会を作らなきゃいけないです。

【大石】 岡田先生、どうでしょう。

【岡田】 もう、僕らが始めたころと時代も変わりすぎちゃってね。僕らの時代というのは、直接会ってディスカッションして、外国から帰ってきた人にいろいろ聞いて「ああ、そうか」って、そういう時代だったのが、今、何かもうインターネットでパッと調べてきて(笑)、それで携帯電話でチャチャッとすると、そういう時代だから。

それから、これは分子生物の話ではないけれど、研究なんかも、昔は「これをやりたいからこれをやろう」と。それで「あ、こんないい結果が出たから、どこかへ出そうか」と。この頃の若い人を見てみると、最初にインパクトファクターを稼ぐためにこれをしようかというような感じで、何か研究の本質というのかなあ、卒業生と話しをしても、そういうことを頑張らないと負け組みになる? と、そういうような雰囲気を感じるのよね。

僕はもうこのところ分子生物学会に行っていないから、わからないのだけど、今の分子生物学会というのは、僕らの時の時代みたいに、若い人が中心になって、それでワーワー言ってるようなことはないの? それとも、昔のもう生化学会と同じようになっているのではないの?

【長田】 いえ、生化学会とは違います。

【岡田】 全然違う?

【長田】 全然違います。やっぱり、分子生物学会年会に行けば、ポスター会場は熱気に満ちていますし、口頭発表に対しても次々と質問が出てきて、みんなワイワイやっている雰囲気です、生化学会とは違います。

【関口】 格さんの時代なんかも、本当にやかましくやっています。あれは、中心人物は愉快だったと思いますけど。

【岡田】 生化学会に行くと、そうではない?

【長田】 残念ながら、はい。

【三浦】 僕はここで今、そういう話をするべきかどうか、よくわからないけど、これからの分子生物学をやる人たちのシチュエーションを考えると、非常に今、憂れうべき状態だと思うんです。就職がないし、要するに、ワーキングプアばかり増やしているわけでね。ポストドクだけで対処しようとしても、ね。それから、今、大学院への入学者が減り始めているのですよ、特にドクターコースを目指す人ね。このことは、今、学会としてやっぱり運動をしないと、いけないのかなあ。

【村松】 結局あれですか、大学の研究要員とか。

【三浦】そうですね。

【村松】准教授を増やすとか。これ、ものすごい重要だと思いますね。これだけ文明が栄えた国なのだから、そういうものに、もう少しお金をかけて増やしてしかるべきだと、僕は思っています。

医学部でも、要するに大学院に来る人は非常に減ってしまっていて、何ていうのかな、専門医は給料もちよっと高くなるけれど、それ以外のところは、医学博士を取るといような人たちが減りつつあるのです。学位取ってももうからないということだけど、そういうのは非常に困るよね。それを増やすには、どうすればいいかという、やはり、経済的サポートですね。マスターやドクターに行っても、そこできちんと生活できるようにならないと。

【大石】僕もちょっと言わせて頂ければ、基本的には、分子生物学会がこれだけ拡がってきたということは、みんながサポートしてきたという面では、非常にポジティブなのですけどね。何か僕たちの場合には、やっぱり興味のあるもの、大げさにいうと真理ですね、そういうものに対して、もうそれだけで、やってきた。場合によっては自分がどうなるかわからなくても、やってきた。しかし研究も、これだけ高度な色々なことに行くと、やっぱりすぐ応用とか、生活のどこに役立つとか、そういうばかりになってきた。本当の個人の興味を持って、純粋に生物現象を研究するということが、なかなか大変な状況であると、そういう傾向になってきたのではと思います。まだまだわからないことの中に、大事なことがたくさんありますよね。昔と違って、今、特許が幾つあるとか、どうやって実用化のめどがつくのか？ そういうことばかりで、ほんとに僕は嘆かわしいと思っているのです。

【村松】学問は、真理の探究ですものね。

【大石】外国の考えは、海外に行くと、やっぱりちょっと違います。ほんとの意味での、ほんとのサイエンスというものについての評価は昔と全然変わってなくて、むしろそういうことに、キラキラしてみんな集中していくのだけど、日本は何かというと「それがどうなんですか」、「それがどういう役に立つんですか」と。科学者がそういうことを考えるようになっては、おしまいだと思うのです。だから僕は、ノーベル物理学賞をもらった小柴さんに、非常に感動したのは、その研究が何が役に立つか、「これ全然役に立ちません」と、いわれたことです(笑)

だから、言いたいことがあるとすれば、やはりそこです。外国の学会は、やっぱりそういうところも健全だから。だから、分子生物学会もちゃんとやらないと。

【長田】だけど、学会として、そのような問題に対して何ができます？ 研究費もそうですが、人事の面でも任

期制のポストが増え、じっくり仕事ができるという時代じゃなくなってきています。我々の時代、特に私なんかはいちばん楽しくやってきた人間と思っていますが、次の世代の人たちは、非常にたいへんな状態になっています。

【大石】う～ん、せこい、せこすぎますね。

【長田】はい。何か研究計画を出しても「それで3年後、5年後にどういう成果になりますか」って聞かれる。そればかりです。

【大石】わからなくていいのですよ。むしろわかるほうが、わかるような仕事は、仕事じゃない。

【三浦】5年計画のプロジェクト研究でも3年ぐらいで、見直して、ものすごく厳しくなっている。言い方を変えれば、中央省庁の学問に対する圧力だよな。

【長田】学会として、出来ることは難しいですよな。

【三浦】そういうことは、この学会だけの問題じゃないよね。やっぱり問題を、関連学会が束になってでも言っていくことは必要ですよ。

【村松】1つは、あまり短期的な展望で動かれては困ると。やっぱり国家百年の計を考えるのが中央省庁でしょう。それをきちんと考えてくださいということです。そうすれば「3年でデータが出るか」とかそんなこと言うはずはないからね。もっと、国の科学行政の人達に考え直してもらわなければいかんと。長期的な視点で日本のためになることを！これが重要です。

【大石】今、日本の分子生物学会というのは、おそらく日本の学会の中で、一、二を争う影響力のある学会なのだと思いますよ、本当にね。生物学はとても大事で、しかもその分野の最も中心にある学会だから、会員も1万数千人で。だから言うべきことは、ある程度きちんと言わなきゃだめです。

分子生物学会を始めた頃は、自分は正しいと思っていたけど、でも生化学会も圧倒的な力を持っていたしね。生化学会の先生から、僕たちはいじめられたわけではないけど、まあ色々厳しいこともありましたよ。だけど、分子生物学会は今、全然何も恐れることないですよ、まさしく健全だしね。30年経って、このように成長してきたことを僕はとても嬉しく思うし、自然科学を代表する学会の1つになったのだから、自信をもっていいでしょう。今はこうやって法人化したのだから、いいじゃないですか。このまままっすぐに進むと。しかし一面、社会に対してより大きな責任が出てきたので、これからは理科教育のこと、研究費のこと、サイエンス全体のことなど、学会として積極的に取り組み、社会への情報発信や提言を出していくなど、さらなる活動を望みたいですね。

【松原】分子生物学会の今の立場を考えると、長田さん、がんばってやること、たくさんありますね。

【長田】 はい。執行部、現役世代、頑張りますので宜しくお願いします。

【永田】 ご長老の先生方も、まだまだお休みなどされないうで、そして学会外での活動も頑張って頂いて、研究の世界がよくなるよう、もうひと踏ん張り、宜しくお願いします。

【大石】 そろそろ時間ですが、皆さん、よろしいでしょうか。それでは、本当に有意義な話しをありがとうございます

いました。

【長田】 どうもありがとうございました。長時間にわたって貴重な話、ありがとうございました。ほんとにいい議論が出来ました。分子生物学会は会員皆が、自由にものを言える学会のはずなので、その伝統を引き継いでいかなければいけないと思っています。これからも宜しくお願いいたします。

〔了〕



趣 意 書 (案)

近代生物学の発展の過程において、生命現象を分子レベルで理解把握しようとする分子生物学の果たした役割は大きいと云えましょう。すなわち生体構造の分子レベルでの理解のほか、分子識別、相互作用、物質に担われた情報の流れなどの研究から生命現象の解明が試みられて来ました。その中で我が国の研究者も数多くの重要で多様な貢献を果たし、また果たしつつあります。

分子生物学における研究内容が深まると共に、当然より複雑且つ高次の生命現象を研究対象とすることが可能となり、それに伴い取扱い対象も高等生物にいたるまで多様になっています。一方新しい分子生物学的思考と技術も次々と開発、発展されています。第二期を迎えた分子生物学が更に新しい展開をしつつあることを否定する人はいないであります。

我が国における分子生物学の研究も、この状況を正しく反映して、その幅を広げることに努めなければなりません。そのためには、広い範囲において生命現象を分子レベルで研究している人達の間で交流を深め、討論の場を拡大することが必要と考えられます。

以上の観点から、異った分野に散らばる分子生物学の研究者を横につなく組織として「分子生物学会」を創設することを提案いたします。

分子生物学会の活動として、次のような事項を考えております。

- 一、分子生物学の領域で総合的な学術集会を開く。
- 二、特定のテーマについて適宜シンポジウム・ワークショップなどを開く。
- 三、会員の研究上の便宜をはかるため、会報を刊行する。
- 四、Proceedings (英文) をつくり、国際的交流にも努力する。
- 五、分子生物学の研究体制や研究環境の向上を考える母体となる。
- 六、分子生物学が生物学の教育においても大きな比重を占め、また社会的にも関心の深い問題となつて来た状況に鑑み、それらに対しても必要な責務と対応の場を提供する。

学問の進歩にともない、それぞれの分野はますます分化する傾向にあります。ここに考える分子生物学会は、広い領域にまたがる研究者がそれぞれの専門分野で研究を続けつつ連携し、真に学際的立場に立脚した生命科学をつくることを目指すものであります。

以上の趣旨にご賛同の上、「分子生物学会」にご入会下さるようお願い致します。

歴代の年会長 / 会長 (理事長) 名簿

日本分子生物学会

年会		年会長	開催地	発表件数 (一般演題)	会員数	会長 (第 15 期より理事長)
1	1978	岡田 吉美 (東京大学理学部)	東京	162	600	
2	1979	関口 睦夫 (九州大学医学部)	福岡	187		【第 1 期】 (1979.4.1 ~ 1981.3.31) 渡邊 格 (慶應義塾大学)
3	1980	志村 令郎 (京都大学理学部)	京都	231		
4	1981	吉川 寛 (金沢大学がん研究所)	金沢	268		【第 2 期】 (1981.4.1 ~ 1983.3.31) 渡邊 格 (慶應義塾大学)
5	1982	村松 正實 (癌研究所生化学部)	東京	340		
6	1983	藤永 恵 (札幌医科大学がん研究所)	札幌	314		【第 3 期】 (1983.4.1 ~ 1985.3.31) 内田 久雄 (東京大学医科学研究所)
7	1984	松原 謙一 (大阪大学細胞工学センター)	神戸	480	1,511	
8	1985	内田 久雄 (東京大学医科学研究所)	東京	560	1,832	【第 4 期】 (1985.4.1 ~ 1987.3.31) 内田 久雄 (東京大学医科学研究所)
9	1986	大沢 省三 (名古屋大学理学部)	名古屋	880 (日本遺伝学会との合同年会)	2,236	
10	1987	由良 隆 (京都大学ウイルス研究所)	京都	820	2,600	【第 5 期】 (1987.4.1 ~ 1989.3.31) 高浪 満 (京都大学化学研究所)
11	1988	三浦謹一郎 (東京大学工学部)	東京	983	3,144	
12	1989	水野 重樹 (東北大学農学部)	仙台	1,015	3,596	【第 6 期】 (1989.4.1 ~ 1991.3.31) 関口 睦夫 (九州大学医学部)
13	1990	小川 英行 (大阪大学理学部)	京都	1,158	4,076	
14	1991	堀内 忠郎 (九州大学薬学部)	福岡	1,339	4,700	【第 7 期】 (1991.4.1 ~ 1993.3.31) 三浦謹一郎 (東京大学工学部 / 学習院大学)
15	1992	今本 文男 (京都薬科大学)	京都	1,571	5,323	
16	1993	大石 道夫 (東京大学分子細胞生物学研究所)	幕張	1,597	6,083	【第 8 期】 (1993.4.1 ~ 1995.3.31) 吉川 寛 (大阪大学医学部)
17	1994	石浜 明 (国立遺伝学研究所)	神戸	1,924	6,995	
18	1995	岡崎 恒子 (名古屋大学理学部)	名古屋	2,064	7,904	【第 9 期】 (1995.4.1 ~ 1997.3.31) 松原 謙一 (大阪大学細胞工学センター)
19	1996	大塚 栄子 (北海道大学薬学部)	札幌	4,693 (日本生化学会大会との合同年会)	8,649	
20	1997	本庶 佑 (京都大学医学部)	京都	2,686	9,070	【第 10 期】 (1997.4.1 ~ 1999.3.31) 大石 道夫 (かずさ DNA 研究所)
21	1998	吉田 光昭 (東京大学医科学研究所)	横浜	2,892	10,500	

22	1999	西本 毅治 (九州大学医学部)	福岡	3,087	11,307	【第 11 期】 (1999.4.1 ~ 2001.3.31) 柳田 充弘 (京都大学大学院生命科学研究所)
23	2000	杉野 明雄 (大阪大学微生物病研究所)	神戸	3,094	11,994	
24	2001	山本 正幸 (東京大学大学院理学研究科)	横浜	3,133	13,186	【第 12 期】 (2001.4.1 ~ 2003.3.31) 小川 智子 (国立遺伝学研究所 / 岩手看護短期大学)
25	2002	藤井 義明 (筑波大学先端学際領域研究センター / 東北大学)	横浜	3,449	13,835	
26	2003	勝木 元也 (岡崎国立・基礎生物学研究所)	神戸	3,646	14,945	【第 13 期】 (2003.4.1 ~ 2005.3.31) 山本 正幸 (東京大学大学院理学系研究科)
27	2004	柳田 充弘 (京都大学大学院生命科学研究所)	神戸	3,801	16,017	
28	2005	佐方 功幸 (九州大学大学院理学研究院)	福岡	4,059	16,485	【第 14 期】 (2005.4.1 ~ 2007.3.31) 花岡 文雄 (大阪大学大学院生命機能研究科)
29	2006	中西 重忠 (大阪バイオサイエンス研究所)	京都	4,649 (第 20 回国際生化学・分子生物学会 議として開催)	15,489	
30	2007	山本 雅 (東京大学医科学研究所)	横浜	5,581 (日本生化学会大会との合同年会)	15,967	【第 15 期】 (2007.4.1 ~ 2008.9.30) 長田 重一 (京都大学大学院医学研究科) ※ 2007.6.19 法人へ移行
31	2008	長田 重一 (京都大学大学院医学研究科)	神戸	(日本生化学会大会との合同年会)	15,173	
32	2009	小原 雄治 (国立遺伝学研究所)	横浜			【第 16 期】 (2008.10.1 ~ 2010.9.30) 岡田 清孝 (基礎生物学研究所)
33	2010	谷口 維紹 (東京大学大学院医学系研究科)	神戸	(日本生化学会大会との合同年会)		

※ 32 回、33 回は予定.

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年 3 回刊行)

第 91 号 増刊号 (2008年11月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——岡田 清孝